

ラブライブ！ LOSTCOLORS

isizu8

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

再び色を無くした少年は歌の女神に出会う……

少年は新しい世界でどんな色を見つけるのだろうか……

初めまして。s sを書くのは今回が初めてです。ロスカラのs sを探して読んでいるうちに、自分もs sを書いてみたいと思い今回、投稿をさせていただきました

普段はロスカラのライ君が主人公のs sを頻繁に読んでおり、ラブライブという作品にライ君を登場させるとどうなるのだろうかと色々妄想するようになったのですが、探してもラブライブとのクロスは見つからなかったなので、それならいつそ自分で書いてしまえ！って勢いだけで今回、このs sを投稿致しました。

小説などこれまで一度も書いたことが無い、文章力も全くないド素人な私ですが、読んでいただけたら嬉しいです！

まだまだ未熟な私ですが、これからよろしくお願い致します。

目次

第1部 NINE COLORS

STAGE 01	橙の少女と銀の少年	1
STAGE 02	廃校阻止計画	5
STAGE 03	奇跡の始まり	10
STAGE 04	その名は μ s	15
STAGE 05	記憶の欠片	21
STAGE 06	橙の少女の想い	27
STAGE 07	動き出す3人の女神	34
STAGE 08	幼馴染	42
STAGE 09	ファーストライブ	47
STAGE 10	青と蒼 前編	56
STAGE 11	黒の追憶と花の少女	75
STAGE 12	花の迷い	81
STAGE 13	花の決意	89
STAGE 14	アイドル レッスン	97
STAGE 15	アイドル ギブアップ	106
STAGE 16	アイドル リスタート	117
STAGE 17	ことりの秘密	128
STAGE 18	女神たちの日常	134

第1部 NINE COLORS
STAGE 01 橙の少女と銀の少年

「そうか、未練はないのだな」

「未練はある。だから、未練はない」

「意味が分からないぞ」

「簡単な話だ」

その少年は一旦言葉を切った。

「未練はありすぎる。この学園や騎士団ですごす日々を、僕は失いたくはない。だから、この日々を失わせる僕は、ここにいるべきじゃない。それが分かったから、僕はここを自分の意思で出ていける。……ここに残ることに、未練はない」

「……それを未練と言う気もするがな」

……

「そのサークルに立って、君の願いを言うんだ。そうすれば、君の願いは叶う」

少年はサークルに立ち、両目に宿る赤い鳥に願いを込めて言葉を発した。

「みんなが僕を忘れますように」

——そう。全ては泡沫の夢のように——

……

「また、あの夢か」

最近、いつも同じ夢を見る。

その夢では僕と見た目が殆ど似ている少年と緑色の髪の女性が写っていた。

どうやらその少年は自分がその場所にいることで周りの人に危険

を及ぼすかも知れないと考え、その人達の日常を失わせないため、自分がその場所からいなくなると決意した。

少年は『未練はない』と言うのに対し、少女は『それもまた、未練と言う気がする』と話す。

そして、場面は切り替わり、少年は自分を忘れて欲しいと願いを込めた。

……それにしても、よくハッキリと覚えているものだ。

普通寝ている間に見ていた夢は、目が覚めれば曖昧になるか、忘れていくかのどちらかだろう……

もしかすると僕が失った記憶と何か関係しているのだろうか？

まさかな……

「とりあえず、今日も記憶を探しに出かけてみるか……」

僕は支度をして、街に出かけた。

……

僕は記憶の手がかりを探しに街まで出かけていた。

すると道中でなにやら人だかりが出来ていた。

何事かと近づいてみたら、そこに集まっている人達は皆、中央の大モニターに夢中なようだ。しばらくするとそのモニターに3人の女性映った。

「UTX高校へようこそ！みなさーん、お元気ですかー！」

彼女達の声を聞いた、その場にいた人達のほとんどが歓声を上げた。

周りの人達の反応から察するに彼女達は有名人か何かなのだろうか？

「はあ!? アンタそんなことも知らないの?」

「……!?!」

まるで僕の思考を読んだかのように声が上がる。

しかし、その言葉は僕に向けたものではなかった。

僕はその声の正体に近づいてみると、そこには学生服を身にまとっ

た橙色の髪の少女と怪しい格好をしている黒髪の少女が話をしていた。

「A—R—I—S—E（アライズ）よA—R—I—S—E……」

「A—R—I—S—E？」

「スクールアイドル。学校で形成されたアイドルのことよ。知らないの？」

スクールアイドル？

A—R—I—S—E？

……どれも聞いたことがない。

さも常識のように語るその少女と、モニターに集まっている人達の反応……

それに対し、スクールアイドルやA—R—I—S—Eといった存在を知らないのは、この場では僕とその場にいた橙色の髪の少女だけのようにだ。

その状況からして、スクールアイドルという存在は世間では常識になっっているのだろう。

もしかすると記憶を失う前は、僕も彼女達の存在を知っていたのだろうか？

僕が考え事をしてっていると、やがてそのモニターの映像が切り替わり、A—R—I—S—Eのパフォーマンス映像が映っていた。

完成された動き……

そしてどこか挑発するようなその瞳が、モニター越しでも他を圧倒する存在感を感じさせる。

なるほど。これがスクールアイドル。

そしてA—R—I—S—Eか……

僕が彼女達のパフォーマンスに感心していると、その映像を見ていた少女の1人がよろけた様子で近くの手すりにもたれ掛かった……

「大丈夫かい？」

僕は彼女が心配になり、声をかけるが……

「見つけた!!」

「え？」

「閃いたんです！ 最っ高のアイデアが!!」

彼女は輝いた表情で僕を見てそう言った。そしてすぐに走り出した……

「何だったんだ？ 一体……ん？」

ふと自分の足元を見てみると、そこには生徒手帳と思しきものが落ちていた……

音ノ木坂学院と書かれた生徒手帳がそこにはあった。

おそらく先ほど走り出した少女の物だろう……

僕がこのままこの手帳を持っている訳にもいかないだろうし、彼女も生徒手帳がないと困るだろう。

僕はこの手帳を届けに音ノ木坂学院という学校まで行くことにした……

STAGE 02

廃校 阻止 計画

僕はあれから生徒手帳を届けに音ノ木坂学院に向かった。

しかし、その学校にはいままで一度も行ったことが無いので結果、道に迷ってしまった……

道行く人に学校のことを訪ね、着くのが予想より遅くなってしまったが、なんとかその学校までたどり着くことができた。

さて、この手帳の持ち主は分かっているのですが、後はあの少女にこの手帳を届けるだけなのだが、僕はその学校に入れずにいた。

なぜなら僕は男で、女子校に見知らぬ男がいきなり入れば不審者として通報されてしまうだろうから。

僕がその場でしばらく立ち尽くしていると、こちらの存在を不審に思ったのか、1人の女子生徒が声を掛けてきた。

「そこの貴方、この学院に何か用事でもあるのかしら？」

振り返るとそこには金色の髪の女子生徒がいた。

その生徒は、学生とは思えないほど凛としていて、その透き通った青い瞳は真っ直ぐに僕の目を捉えた。

明らかに僕を警戒している様子だ。

そしてその傍らには紫色の髪をした、不思議な雰囲気が漂う女子生徒もいた。

「はい。今朝、音ノ木坂学院の生徒が落とした生徒手帳を届けに来ました」

僕がこの学院に訪れた理由を説明すると、彼女から警戒心が減ったのを感じた。

「そうですか……うちの生徒がご迷惑をお掛けしてすみません」

「いえ……部外者の僕がこの学校に入るわけには行きませんので、この手帳のことはお願いしても良いですか？えっと、貴女方は……」

「私は絢瀬絵里です。この学院の生徒会長を務めています」

「うちは東條希。生徒会副会長をしていますよ」

「僕は皇（すめらぎ）ライです。よろしくお願いします」

「皇……」

「エリチ、もしかしてこの子……」

僕が名乗ると2人は少し驚き、何か相談を始めた。

「どうやら僕の『皇』という名字に反応しているらしいが……」

しばらくすると話がまとまったのか、生徒会長が僕に話しかけてきた。

「皇君。今から少し時間をいただけますか？」

「特に用事も無いので構いませんよ」

「それじゃあ、今から理事長室に来てもらってもええかな？」

「わかりました」

僕は2人についていく形で理事長室に向かった。

……

「貴方はそこで待っていてもらえるかしら？」

「わかりました」

僕は理事長室前まで来ていた。

2人は理事長に説明をするため、先に理事長室に入っていた。

僕はただ、落し物を届けにきただけなのだが……

しばらくすると理事長室の方から声が聞こえてきた。

「どうぞ」

その声は生徒会長のもので副会長のもでも無かった。おそらく理事長らしき人の声だろう。

「失礼します」

理事長室に入るとそこには生徒会長と副会長、そして2人の中央には理事長と思しき人物が座っていた。

「いらつしやい、皇ライ君。話は聞いているわ。我が校の生徒の手帳を届けにきてくれたんですってね」

「はい。しかしこの学院は女子校だと聞いておりましたので、入るのを躊躇っていたところに生徒会長さんと副会長さんが声をかけてきてくれて中を案内してくれました。そして、こちらがその生徒手帳です」

僕は生徒手帳を理事長に手渡した。

「ありがとう……あら？この手帳は高坂さんの物みたいね」

「あの子……」

高坂さんの名前が出た瞬間、ほんの一瞬ではあったが生徒会長の表情が曇ったように見えた……

何にせよこれで僕の役目は終わった。後は帰るだけだ。

「それでは、僕はこれで……」

僕はお辞儀をして立ち去ろうとすると、少し慌てた様子で理事長が僕を引き止めた。

「ちよつと待って、まだ貴方に用事があるの」

「僕に用事、ですか？」

「ええ、実は貴方にお願ひしたいことがあつて……」

僕にお願ひ？ 一体なんだろう……

理事長は一旦言葉を切り、僕に対しとんでもない提案をし始めた。

「貴方、音ノ木坂学院に入学してみない？」

「……え？」

僕は動揺して、すぐにはその言葉を理解できなかった……

……

「僕が、音ノ木坂学院に入学……ですか？」

どういうことだ？ 音ノ木坂学院は女子校だと聞いているのだが

……

「皇くんは知らないと思うけど、現在この音ノ木坂は廃校の危機に瀕しているの」

理事長がそう言うと言と生徒会長と副会長の表情が曇った。

理事長がこの学校について話し始めた。

国立音ノ木坂学院……

秋葉原、神田、神保町の3つの町の狭間にある女子高校であり、古くから続いている伝統校である。

しかし、現在では入学希望者は少なく、廃校を検討しているそうだ。

学校の方で廃校を防ぐ手段を何通りか考えているらしいが、どれも今ひとつ成果が上がらない。

その中の手段の一つとして、共学化があった。

「この学校の状況は理解しました。しかし、どうして僕を？」

「貴方、皇神楽耶さんの息子さんなのでしょう？」

「はい」

正確には養子として、ではあるが……

「私と神楽耶さんは昔からの友人なのよ」

神楽耶さんが昔からの仲の良い友人が存在するという話は、前に神楽耶さん本人から聞いたことがあった。

まさかその友人がこの学校の理事長だったとは……

「それでね？共学のことについて神楽耶さんに相談してみたのだけど、『それなら良い人がいる』って神楽耶さんが言っていたのよ」

「それが僕、ですか？」

「ええ。そういうことになるわね」

理事長の話によると、この学校では現在、共学に賛成する職員と反対する職員に分かれているようだ。

そこを理事長が仲裁に入り、期間・規模を限定したお試しの共学を始めてはどうかと提案した。

それは一定期間で数名の男子生徒を体験入学させ、言い方は悪いが、そこで女子生徒の受けが良ければ共学化を決定するというものだった。

その男子生徒のスカウトについては、言い出しっぺということもあり、理事長が担当した。

しかし提案したのは良いものの、肝心の男子生徒については心当たりが無く、困っていたところを神楽耶さんが相談に乗り、僕を男子生徒のサンプルとして選んだということだった。

……そういえば神楽耶さんが以前、僕に学校へ体験入学してみないかと薦められたことがあった。

僕はそれが記憶の手がかりを掴むきっかけになるのなら、入学してみたいと言ったことがあった。

とはいえ、まさか女子校に入学を薦められることになるとは思わなかったが……

「どうかしら？神楽耶さんの貴方についての話を事前に聞いていたことや、今日こうして生徒手帳をわざわざ届けに来てくれたことから、貴方の人となりはある程度分かったつもりです。私としては是非、貴方をお願いしたいのだけど……」

さて、どうするべきか……

女子校に入学する男子など、良くも悪くも注目の的になり最悪、変態扱いされる危険はあるだろう。

だが、僕としては環境を変えることで、記憶の手がかりを掴むきっかけになるのならこの提案を受けるのも悪くはないと思っている。

もちろん女子校への抵抗はあるのだが、今は自分が無くした記憶を優先したい。

執着しすぎかもしれないが、やはり自分のことが分からないというのは、あまり気分は良くない。

それに、行き場のない僕を助けてくれた神楽耶さんには恩がある。彼女が僕を推薦するのなら、僕がその期待に応えることで彼女への恩返しになるのかもしれない。

僕はそれだけ考えると覚悟を決めた。

「分かりました。僕でよろしければその提案、お受け致します」
後に僕は知ることになる。

この選択が僕の今後の人生を大きく変えることになる……

黒髪の少年はたくさんデータの処理していた。

その少年はとある組織を率いていた。

その組織は現在では優秀な幹部も揃ってきて結成当初よりも、手間は掛からなくなっていた。

しかし、それでも彼が判断しなくてはならない事が多過ぎた。

そして、そんな彼はとある学園の生徒会副会長も担当している。

そのため、生徒会関連で処理する書類が溜まっておりそれもまた、彼でなければ処理できない物ばかりであった。

元々、人より体力が少ない彼は、疲れがピークに達していた。

「全く……処理する問題が多すぎる。少しは人手が欲しいところだ。お前もそう思うだろ？」

彼は振り返り、誰もいない場所に声を掛ける。

「またか……」

彼はここ数日、誰もいない場所に話しかけることが多々あった。

彼が声をかけた先に誰かが存在することを全く疑わず、思わず声をかけてしまうのだ。

「少し疲れたのかもしれない。いい加減休まないと危険だな……さて、次の書類は」

彼が次の書類に手をかける。

しかし、既にその書類の処理は終わっていた。

「なんだ、終わっていたのか。それじゃあ次を……え？」

彼は次々と書類の山を確認する。その書類の山は3割ほどは処理されていた。

「書式は完璧。ミスも全く無い……一体誰が？」

少年は心当たりのある人物を絞り込むが、答えには辿りつけなかった。

「そう言えば前に、会長が言っていたな。俺たちが知らない間に書類を片付けてくれる『妖精さん』がいるって……」

そんな不思議な体験をするのは、彼やその学園の生徒会長だけでは

ない。

黒髪の少年の妹の場合、部屋に飾っている、誰が折ったのか全くわからない折り紙を手取る。

すると、少女は不思議と暖かい気持ちになったそうだ。しかしその理由が思い出せず、その少女は、訳のわからない悲しさを感じて静かに涙を流した。

また、栗色の髪のどこか人懐っこい少年の場合は、物事の正しい手段・方法を考える時、ふと問いかける。

『君はどう思うかな?』と……

その少年もまた、誰もいない場所に話しかけては帰ってこない声に、言いようのない悲しみを感じていた。

彼らだけではなく、その学園にいたほとんどの人間が不思議な体験をしていた。

「さて、そろそろ仕上げないと会長が戻ってきてしまうな。全く、会長は人使いが……」

彼はまた、誰もいない場所に声をかける。

いい加減疲れたことを察したのか、少年は一旦、作業の手を止めて近くの書類に目を通す。

「いい仕事をするじゃないか妖精君?だが、ここまでミスのない書類なら俺が処理したのかもしれないな」

彼はそんな冗談を言いつつも、考える……

(真面目で、堅実な処理だ。こういう人間は嫌いじゃない。いや、妖精だったか?どちらにせよ、野に放しておくには惜しい人材だな。出来れば生徒会に……いや、騎士団にも欲しい人材だ)

そして少年はふと、思う。

もしもその妖精が自分の前に現れたのなら、何故か仲良くできそうな気がして、自分と同じ道を共に歩んでくれそうな気がして、自分のいる部屋を見渡した。

その部屋は広く静まり返っている……

普段より1人分だけ部屋が広くなったような、静かになったような、誰かが欠けてしまったような……そんな気がしてならなかったの

だ。

その少年は無意識に、自分自身が忘れていた『誰か』を探していた
……

……

僕は現在、音ノ木坂学院の生徒会室で入学手続きをしていた。

1年生は1クラスしかなく、席の空きが無いそう。

一方3年生の方は3クラスあり、空きはあるそうなのだが、いきなり3年生から始めるのも厳しいだろうと理事長が判断し、僕はその中間の2年生として入学をすることになった。

現在、そのための手続きを済ませている。

「これでこの手続きは終わりよ。お疲れ様。ここまで時間を取らせてごめんなさいね」

「いえ、必要なことですから。こちらこそ、会長さんと副会長さんの貴重なお時間を頂いてすみません」

それにしても、不思議なこともあるものだ。本来なら男の僕が女子校に入学などできるはずもないのだが……神楽耶さんも随分と強引なことをするものだ。

「失礼します！」

入学手続きを済ませている途中、生徒会室に3人の生徒が入室してきた。

その生徒の1人は、橙色の髪の毛の先日出会った少女……高坂さんであつた。

そして彼女を挟む形で並んでいる長く伸びた青色の髪の毛の少女と、灰色で独特な結び方のサイドテールの髪が印象に残る少女が真剣な表情で入室してきた。

そして高坂さんが生徒会長に1枚の用紙を提出した。

その用紙には『講堂使用許可申請書』と書かれていた。

「……一体これは何かしら？」

会長がその用紙に目を通すと、先ほどの優しい態度から一変して不

機嫌そうな表情で3人の生徒にそう問いかけた……そして高坂さんが話し始めた。

「講堂の使用許可を頂きたいんです。お願いします!」

高坂さんが頭を下げると、続けて2人の少女も頭を下げた。

「何に使用するの?」

「ライブです!3人でスクールアイドルを結成したので、その初ライブを講堂でやることにしたんです」

高坂さんは顔を上げ堂々と答えるが、彼女の隣にいた2人が高坂さんに話しかける。

「まだ出来るかどうかはわからないよ?」

「ええ?やるよう……」

「待ってください!ステージに立つことについてはまだ……」

そんな様子をどこか呆れた表情で見つめた会長は、3人に話しかける。

「出来るの?そんな状態で……」

会長の態度に気圧されたのか、高坂さんは少し緊張した様子で答える。

「だ、大丈夫ですっ!やれます」

「……新入生歓迎会は遊びでは無いのよ」

だが、そんな彼女に対して会長はどこか冷たく言葉を返す。

しかし、そんな会長に対して副会長は……

「3人は講堂の使用許可を取りに来たんやろ?……部活でも無いのに、生徒会が内容までとやかく言うことはないはずやん? 皇くんもそう思わん?」

そう言って、高坂さん達を擁護する。そして何故か僕にその話を振った……

とりあえず僕は自分に支給された生徒手帳を確認しつつ答えた。

「確かに、生徒手帳には『生徒は、校長・副校長・生活指導担当の許可を得れば、自由に講堂を使用することができる』と書いてはあります
が……」

僕はそう答えつつ会長の方を見ると、彼女はすっと目を細めてい

た。

そんな会長の様子を全く気にせず副会長は話を続けた。

「せやから、校長先生たちの許可を取ることができれば、ウチらからは特に口出しはせえへんよ」

「あ、ありがとうございます！失礼しました!!」

そして3人の生徒は退室した。会長がそれを確認すると、副会長に問いかける。

「何故、あの子たちの味方をするの？それに皇くんまで巻き込んで……」

副会長は室内の窓を開け、答えた。

「何度やってもそうしろって言うんや」

「誰が？」

「カードが」

「え？」

「カードがウチにそう告げるんや！」

僕は今ひとつ、副会長の言っている言葉の意味が分からなかった。

思わず机の方に視線を写すと、机に束になって置いてあるタロットカードらしき物を見つけた。

すると開けた窓から風が入る。

束になったカードが散らばり、風と一緒に入ってきた桜の花びらと共に宙を舞う。

そして風の勢いで飛ばされた、1枚の『THE SUN』と書かれたカードが正位置で壁に張り付いていた……

高坂さん達の話が終わった後、僕は副会長に学院を案内してもらっていた。

教室、体育館、図書館……と、次々と訪れ、そこで活動している生徒達を眺めていると不思議と暖かさと懐かしさを感じた。

まるで僕が以前、どこかで学校生活を送っていたかのような……

記憶を無くし倒れていた僕が、神楽耶さんに保護された時、僕はこの地域では見慣れない黒い学生服を着ていたそうだ。

おそらく記憶を失う前、僕はどこかの学校に通っていたのだろう

……

また、この学院は女子校であるため当然、男子用の学生服は用意されていない。だから僕はこの学院にいる間はすでに着ていた学生服を着用し、この学院に通うことになっている。

一通り学院を回ると、副会長が僕に尋ねた。

「ここまで一緒に回ってみて、何か思ったことある？面白かった場所やとか」

「アルパカ……ですね。中庭にいた」

僕は咄嗟に適当なことを答えたが、本心では違った。

印象に残ったことといえば、この学院で楽しそうにすごしている生徒達だった。

彼女達を見ていると、不思議な気持ちになった……

健全な男子が女子生徒じゃない空間でこんなことを堂々と口にしようものなら、変態扱いされかねないので、口には出さなかったが……

無論、彼女達をそういう目で見ていたわけでは無く、どちらかと言うと僕が感じていたのは『懐かしい』という気持ちだった。

やはり、記憶を失う前、僕はどこかの学校に通っていたのだろう。

なにか証拠があるとしたら今、僕が着ている制服だと思うが、この制服を採用している学校はこの国には無いので、ただのコスプレ衣装である可能性もある。

あるいはどこかの外国の学校か……

「まあ、アルパカを飼う学校も珍しいよなあ」

僕が考え事をしていると、副会長は僕が咄嗟に口にした感想に反応したようだ。

僕は先ほどの問い対し適当に返事をしたことを少し申し訳なく感じた……

次に音楽室の前までくると副会長が何か思いついたように僕に話しかけた。

「ごめんな？ウチちよつと用事を思い出したから、少しここで待ってもらってもええかな？」

「はい、構いませんよ。ではこちらで待機していますね」

「ほんとごめんな。なるべく急ぐからそこで待っててな」

僕は音楽室の近くで待機することになった。

すると音楽室から綺麗な歌声が聞こえてきた。

その歌声は、耳に心地よく感じ、不思議と心を動かされる。

しかし、よく分からない感覚が僕の心の中を刺激する……

僕は音楽室の扉の前まで近づいた。

扉の前まで近づくとその少女が僕に気づいた。

僕は思い切って音楽室の中に入って見た……

その室内には赤毛とツリ目が特徴的な少女がこちらをどこか不審そうな目で見てきた。

とりあえず、誤解も解きたいので僕はその少女に、自分の事情を話した。

……

「女子校に男子が入学だなんて、意味がわからないわ」

「それは、そうだな」

僕は同意するしかなかった……

「それで、貴方はどうして音楽室の前で突っ立っていたんですか？」

「副会長に学院を案内してもらっていたのだが、途中で用事を思い出

したそうなんだ。それで音楽室の近くで待機していたら、ここから綺麗な歌声が聴こえたから、僕はここに来た。理由としてはそんなところだ」

「何ですかそれ？意味がわかりません……」

その少女は不機嫌そうに答えながら、その顔はなぜか少し赤く染まっていた。

「あの先輩も貴方も、私が歌うとなんでこっちへ来るのかしら」

「あの先輩？」

「2年生のとある先輩のことです。その人も最初、私が歌つてるところに来て感動したとか、歌とピアノが上手とか……アイドルみたいにか、可愛いとか言ってきて……」

僕はその2年生の先輩に心当たりは無かったが、その人もまた、彼女の綺麗な歌声に惹かれたのだろう。

「そしてその先輩は突然、私にアイドルをやってみないかって意味わかんないこと言うんです。もちろんお断りしましたけど……」

「それは、どうしてだい？」

僕はその理由が少し気になったので聞いてみた。

「軽いからです。アイドルって何か薄っぺらくて、ただ遊んでるみたいで……」

彼女にとつてアイドルとは、そういう風に見えるのだろう。

だけでもしこの子がアイドルを始めるのなら、それはきつと薄っぺらいものなんかじゃなく、後の歴史に名を残すような素敵な存在になっっているのだろう。

それは、彼女の暖かさを感じさせる歌と、どこか高貴にも見えるその容姿、そして彼女を一番最初に見染めたその先輩が証明してくれるだろう。

僕は彼女が不満そうに語る中、何故かそんなことを考えた。

それはそうと、僕は先ほどの感覚が気になったので、思い切って彼女にお願いしてみた。

「迷惑はかけないから、先ほどの歌の続きを聴いてみたい。いいかな？」

最も彼女の場合、僕がこの教室にいること自体が迷惑なのだろうけど……

「す、好きにすればいいじゃないですかっ!」

彼女は素っ気なく答えつつも、拒否はしないでくれた。

そして彼女は歌を披露してくれた。

やはり、彼女の歌声は素敵だった。

その歌声はまるで、母親の温もりのような暖かさを感じさせた。先ほどの感覚の正体はそういうものだったのかもしれない。

失くしたはずの記憶が僕に対し、何かをうったえているような……そんな感覚があった。

そして彼女の歌が終わる頃、廊下から聞き覚えのある声が聴こえてきた。

「皇くん!どこにおるん?」

声の正体は副会長だった。そう言えば僕は廊下で待機すると言っていたのだ。

「副会長も呼んでるみたいだし、僕はこれで失礼するよ。それじゃあ……」

「ちよつと待って。貴方、名前は?」

「皇ライだ。ライで構わない……そういう君は?」

「私は……西木野真姫」

「西木野さん……また、君の歌を聴きたい。西木野さんが良ければだけど」

「何それ、意味わかんない……好きにすればいいじゃないですか」

「ありがとう」

僕は音楽室を後にした……

……

その後、副会長と廊下を歩いていると、その中に1箇所、不自然に勉強机が置かれていた。

その近くに視線を注目すると『初ライブのお知らせ!』と書いてあ

る1枚の張り紙が貼ってあった。

また、その張り紙にはグループ名募集とも書いていた。

張り紙には3人の少女の絵が描かれていた。先ほど生徒会室に来た3人に似ている。

そして机の上に視線を移すと投票箱と思しきものが置いてあった。

「皇くん? どうしたん。そんなところで……」

僕が掲示板の張り紙を見ているとふいに副会長が声をかけてきた。

「いえ、あの張り紙と箱が少し気になりました」

僕がそう言うと、副会長が1枚の紙を取り出した。

「ふくん。グループ名募集なあ……皇くん。ちよつとペン借りてもええかな?」

「良いですよ」

僕はペンを手渡し、副会長はその紙に何かを書き始めた。

「何を書いたんですか?」

少し気になったので、その紙をしてみる。するとその紙には『μ

s』と書かれていた。

μ, s (ミューズ) とはおそらく、文芸の女神……音楽、詩歌、舞部、学問などの女神のことだ。

そして、スクールアイドルとしてライブを行うこのグループに対して名付けるその名前の意味としてはおそらく……

「音楽……歌の女神ということか」

「流石やね、一発で意味を当てるなんて。てつきり石鹸って言うかと思つとつたのに」

「石鹸? 何のことです?」

「あー、分からないならいいんよ」

μ, s と石鹸に一体何の関係が……

これに関しては、あまり考えなくても良い気がした。

.....

翌日、講堂に生徒が集められ、僕はその中で自己紹介をした。

女子校に入学する男なんて、前代未聞のことをする僕に最悪、非難の視線を向けられることは覚悟していたのだが……

不思議そうにこちらを見ている人、何故かこちらを見て頬を赤く染めている人など、様々な反応をする人達がいた。

しかし、不思議と僕に非難や敵意を向けるような視線は存在しなかった。

理由はよく分からないが、こんな僕を歓迎してくれるのなら幸いだ。

ここから音ノ木坂学院の一員として、僕の新しい生活が始まる……

STAGE 05

記憶の欠片

音ノ木坂学院へ仮入学した後、僕には生徒会の補佐という役割が与えられた。

おそらく監視の意味も込められているのだろう。

最もこれは、僕の憶測でしかないのだが……

教室で考え事をしていると、3人の少女が僕に話しかけてきた。

「こんにちは皇くん。ライ君って呼んで良いかな？」

「呼びやすい方で構わないよ」

「ありがとっ。私はヒデコ！こっちの2人はフミコとミカね」

「よろしく!!」

「よろしく。ヒデコさん、フミカさん、ミカさん」

「さん付けしなくても大丈夫だよ！そのまま呼んでねっ。ライ君♪」

ヒデコ達の、この出会って間もない異性への態度としては人によっては馴れ馴れしいと感じるのかもしれない。しかし、それが今の僕にとっては救いだった。

「そう言えばライ君。この学院で気になる女の子は見つかった？」

「……え？」

彼女はいきなりそんなことを言い出した……

「気になると言われても、まだこの学院に入ったばかりだし、何とも言えないかな」

「そうなんだ。それじゃあ、せっかく仲良くなったんだし、先ずは我が校の女神について教えてしんぜよう！」

ヒデコはどこか芝居かかった口調でそう言った。

「女神というと、*μ's*の3人のことか？」

「察しがいいねえ。それじゃあ、最初は穂乃果ちゃんのことから教えてあげるね♪」

そして3人が高坂さん達について話し始めた……

……

「少し聞いても良いかしら？」

放課後、生徒会室で書類整理を手伝っていた時、生徒会長がふと、僕に話しかけてきた。

「何ですか？」

「……記憶が無いって、どんな感じなの？」

「……」

「ご、ごめんなさい。話しづらい事なら話さなくても良いのだけど……」

「いえ、大丈夫ですよ」

僕は自分の思っていることをそのまま話した。

「一言でいうと『色が無い』という感じですね」

「色が無い？」

「と、言っても別に色彩感覚が無い訳ではないですよ。例えば、そうですね……」

僕は一旦、言葉を切った。

「例えば、自分の目の前に綺麗な景色があったとすれば、誰しも心が動かされるものでしょう？」

「人によるとは思うけれど、少なくとも私はそう思うわ」

「だけど、僕は何も感じる事ができなかった……どんなに良い景色や街並みを見ても、その光景に何も感じない。まるで、世界が色を持たないように……」

「……」

会長は僕の話の静かに聞いていた。

「ですが最近、この学院に来てから何かが変わった気がするんです」

「何かって？」

「ええ。……この生徒達が楽しそうに過ごしているのを見ると、自分にもそんな経験があったのかもしれないと感じるんです」

「学生生活の経験ね……そう言えば皇くんその制服。ロシアでも見かけたことは無いわね」

「そうか……」

この制服を採用している学校がこの国にない以上、どこかの外国の

制服である可能性があったが、会長の話の通りなら少なくともロシアの学校のものでは無いようだ。

「そう言えば、会長はロシアで過ごしたことがあるんですか？」

「ええ。母がロシア人だったから、小さいころはロシアで過ごしていたの」

そうだったのか。

通りで、あの珍しい金髪や色白の肌は日本人にしては珍しいと思っ
てはいたが。

「なるほど。しかし名前が日本人であるなら、会長はハーフというこ
とでしょうか？」

「いいえ。よく間違えられるけど、ハーフでは無いわね。『クオー
ター』よ」

クォーター……

4分の1。ハーフの『2分の1』とは違い、例えば片親が純血であ
りもう片方の親がハーフであれば、その親達から産まれた子供は
クォーターということになる。

「皇くんも純粋な日本人では無いのでしょうか？その銀髪や私と同じく
らしいの白い肌からして……」

「会長の仰る通り、僕はハーフです。片方はまだ判明していませんが、
もう片方が日本人の血をひいています」

僕が神楽耶さんに拾われてから少し日にちが経った後、身元確認の
ため、僕は血液検査を受けることになった。

そして検査の結果、僕には皇家の親戚の血が流れていることが分
かった。

しかし、不思議なことにその血は100年前に途絶えているそうだ
……

純血では無いそうだが、皇家の親戚の血をひいている僕を放ってお
く訳にはいかないということで、神楽耶さんは僕を養子として迎え入
れてくれた。

「自分の血筋が分かったとはいえ、記憶の方はまだ戻ってはいません。
だから僕は、1日も早く記憶を取り戻し、僕を拾ってくれた神楽耶さ

んや皇家の人たちに恩返ししたいと思っています」

「立派なのね。皇くんは……」

そう言って会長は僕の頭を撫で始めた。

「え？そ、その……会長？」

「あつ……ご、ごめんなさいね。子供扱いした訳では無いのだけど」

「い、いえ。お気になさらず……」

会長が突然撫でてきたことに少し驚いたが、不思議と嫌な気持ちは無かった。

——まるで、あの時のように——

「お爺様をお願いしてみたのよ。貴方がずっとここにいられるように」

……え？

その言葉とともに僕の中に何かのイメージが浮かんできた。

今のは、誰だ？

「本当に戻ったの?!良かったじゃない!って、そうならここにいう意味、綺麗さっぱり無くなっちゃうってことか……」

誰だ？一体……

「フン。そうきたか。でもね生憎、私はそんなことで貴方を手放すつもりはないわよ」

その女性はとても優しくそうに微笑んでいた。

「落ち着いてからで良いから、正式にこの学園に転入しなさい。我が生徒会は優秀な人材を求めているの!」

学園？生徒会？一体どこ……

「これは最優先事項よ。良いわね？」

誰だ?……誰なんだ!?

僕は次々と流れてくるその光景を、ただ眺めていることしかできなかった……

……

「皇くん!!」

「……!!」

気がつくのと絢瀬会長が僕の肩を掴んでこちらに呼びかけていた。

「どうしたの? いきなりぼうつとして……」

「いえ。別に何でも、無いです」

先ほど見えた光景は、僕が失った記憶なのか?

その光景には絢瀬会長と同じ、金髪で肌が色白な女性が映っていた。

学園とか生徒会とか言っていたが……

「皇くん。貴方、泣いているの?」

「えっ?」

言われて、自分の手で頬を触ってみると、その頬は僕が流したと思われる涙で濡れていた。

涙を流すほど、大切な出来事だったのだろうか……

「先ほど、記憶が戻ったような感じがしました」

「記憶が?」

「はい。と言っても少しだけです……」

「それでも良かったじゃない。記憶の手がかりが掴めたのだから」

「そう言っていたけると助かります」

それから会長は、しばらく考え込んだ後、再び僕に話しかけた。

「皇くん。もし良ければ記憶が全て戻った後、その話を聞かせてくれないかしら?」

「僕の、記憶を?」

「ええ。出来ればで良いのだけど……」

「分かりました。その時は、全て話します」

僕は会長が何故、そこまで僕の記憶のことを気にするのか分からなかった。

しかし、会長には入学手続きなどで色々とお世話になっているので、もしその時がきたら話してみよう。

.....

「そういえば、まだ高坂さんにあの手帳を返していなかったな……」
会長の書類整理の手伝いの後、僕はあの時拾った生徒手帳を手に持った。

僕があのとき理事長に渡したはずの手帳は今、僕の手元にある。
理事長が言うには、これからこの学院の一員になるのだから、女子生徒に慣れてもらう為にもこの手帳は僕自身が渡した方が良いと言ってきたのだ。

ヒデコ達の話によると高坂さんは、和菓子屋の娘で『穂むら』というお店に住んでいるそうだ。

いつまでもこの手帳を持っている訳にも行かないので、僕はその店まで足を運んだ……

「いらっしやいませ〜」

「あの、すみません。僕は音ノ木坂学院の生徒で高坂さんの落とし物を……」

「あら？穂乃果のお友達なのね。穂乃果なら部屋にいるから、上がって良いわよ」

「え？あの、僕は別に……」

僕が最後まで事情を話す前に、高坂さんのお母さんはやや強引に、僕を部屋まで案内してくれた。

「穂乃果〜！お友達が来たわよ」

とある一室の扉の前まで来ると、穂乃果のお母さんは高坂さん呼びだした。

僕は手帳を渡しに来ただけで別に、友達と言うわけでも無いのだが……

「お友達？誰だろう……あれ？貴方はこの前うちに入学して来た、えっと、名前は確か……」

「……皇ライだ。よろしく、高坂さん」

僕は、μsのメンバーの1人である高坂穂乃果さんと出会った。

STAGE 06 橙の少女の想い

僕は高坂さんの実家『穂むら』という店に来ていた。

そして、その店に入り本人か、そこのご両親にでも手帳を渡すことが出来れば、僕の役目は終了だ。

店に入ると、そこでは何やら女性が団子を食していた。

「あら、ごめんなさいね。お客さんの前で……」

どうやらその女性はこの店の店員だったようだ。

ということは、おそらくこの人は高坂さんの母親なのだろう。

それなら話が早い、この人に手帳を渡してしまおう。

理事長は、僕が直接手渡した方がいいと言ってはいたが……

「あの、すみません。僕は先日、音ノ木坂学院に入学した者で、本日は、高坂さんの落し物を……」

「あら？穂乃果のお友達なのね。穂乃果なら部屋にいるから、上がって良いわよ」

高坂さんのお母さんは僕が全てを言い終わる前にそう答えた。

「いや、僕は別に……」

「遠慮しないで良いから、部屋まで案内するわ」

僕はやや強引に高坂さんの部屋まで連れて行かれた……

この手帳を本人に手渡すことが出来れば、僕にとっても都合はいいが……

だからと言って、いきなり知り合ったこともない女の子の部屋に上り込むのも、正直気が引ける。

家まで来ておいて何を今更、という話かもしれないが……

その後、高坂さんのお母さんは、僕を部屋の前まで案内して高坂さんを呼び出した。

少し時間がたった後、部屋から高坂さんが出て来た。

「お友達って誰だろう……海未ちゃんのことりちゃんは今日は用事があるって言ってたし」

そして高坂さんは僕を見て、一瞬固まった。

「それじゃあ、後は若い2人に任せて……私は退散するわね」

「ちよ、ちよつとお母さん!」

「ぐゅっくり〜」

穂乃果のお母さんはそれだけ言うと、部屋から立ち去った。

部屋の前に取り残された僕と高坂さんに静寂が流れた。

そして、僕がかける言葉に困っていると、高坂さんの方から話しかけて来た。

「と、とりあえず、部屋の中入る?」

「あ、ああ」

僕は高坂さんの部屋にお邪魔した……

……

「皇ライだ。よろしく、高坂さん」

「ど、どうも。高坂穂乃果です」

僕は高坂さんのお母さんに部屋まで案内された。

そして今、机を挟む形で僕と高坂さんは座って対面していた。

高坂さんは明らかに緊張していた。

まあ、友達でもなんでも無い男子が突然、自分の部屋に入ってきたらこうもなるだろう。

嫌われて無いといいが……

お互いに無言のまましていると、ついに高坂さんの方から話しかけて来た。

「あ、あの! 皇くんはどうしてうちまで来たの?」

「僕は……落し物を届けに来た」

「えっ?」

「この生徒手帳、君のだろうか?」

「あつ……」

僕はその手帳を高坂さんに返した。

「あつ、ありがとうございます! ですけど、一体どこで見つけたんですか?」

「この間、UTX学園の前で見つけた。確か君もそこにいただろう?」

「UTX……」

僕と高坂さんはその時、既に出会っていたはずではあるが、もしかして気づいていないのだろうか？

「あっ！そう言えば私、あのとき誰かに話しかけてたような気が……」

そして思い出したのか高坂さんの表情がパツとする。

「あの銀髪の人!!」

どうやら気づいたようだ……

……

「それでねっ、そのとき海未ちゃんが、あっ、海未ちゃんって言うのはね？私の友達で……」

あれから……

先ほど緊張していた高坂さんは、僕がここに来た事情を知ると、すぐさま緊張が解け、今ではこのように、僕に対して気さくに接してくれている。

ただ手帳を渡しただけで、ここまで気を許すものなのか？

いや、おそらくこの高坂穂乃果という人物が、誰とでも気兼ね無く話せる人なのだろう。

僕としても、いつまでも緊張されたままでは居心地が良くなかったため、この対応はありがたい。

「そう言えば高坂さんはどうして、UTX学園前にいたんだい？」

「穂乃果で良いよ。私もライ君って呼ぶねっ！……えっ！とそれでね、UTXにいた理由なんだけど」

そうして穂乃果は話を続けた。

「音ノ木坂の廃校を防ぐために何か良い案ないかなーって思ってた時に、雪穂がUTXのパンフレットを読んでたんだけど。あっ、雪穂っていうのは私の妹のことだね。それでUTXのパンフレットを読んだときに、あるページにA-RISEが人気だっ！ことを知ったの……そしてUTXまで行ってみてA-RISEのライブ映像を見た時に、これだ！って閃いたの」

「そうか。それで、スクールアイドルを……」

思えばあの時、穂乃果は僕の方を見て『最高のアイデアが閃いた』と言っていたな。

僕が穂乃果から事情を聞いていると、部屋の外からノックの音が聞こえた。

「お姉ちゃん、入るよ〜」

「雪穂、どうしたの？」

「お団子の差し入れー。お母さんが持って行って……え？」

そう言つて穂乃果の妹さん、雪穂と呼ばれた少女が部屋に入つて僕を見て驚いていた。

「お姉ちゃん！いつの間に彼氏作ったの!？」

「か、彼氏じゃないよ!」

なにやら誤解をしているみたいなので、僕と穂乃果は妹さんのその誤解を解いた。

……

「へえ。それじゃあ、貴方が最近噂の人なんですね」

「ライ君の噂？」

「うん。うちの学校まで広がってるよ。音ノ木坂に男子が入ったつて」

「その人たちは僕のことについて何か言っていたかな？」

「はい。音ノ木坂に銀髪の格好良い男子が来たーって、女子と一部の男子の間で噂になってますよ」

ちよつと待て。一部の男子ってなんだ？

怖い考えが頭の中を横切ったので、僕は忘れるように考えるのをやめた。

その後、妹さんが持って来た団子をご馳走になった。

「美味しい……」

「ありがとうございます。残りはこちらに置いておきますから、良かったら食べてくださいね」

「ありがとう。高坂さん」

「雪穂で良いですよ。お姉ちゃんと同じ苗字だと、呼ぶときに分かりづらいでしょう?」

「良いのかい? 僕みたいな得体の知れない男に……」

「僕がそう言うのと2人は同時に吹き出し、そして笑い出した。」

「あははは。ライ君は心配し過ぎだよ」

「そうですよ。『得体が知れない』なんて、自分で言う人初めて見ました」

「そ、そうかな?」

それにしても、2人とも少し笑いすぎではないか?

「とにかく、私のことは雪穂で良いですから。これからよろしく願いしますね。ライさん」

「よろしく。雪穂」

その後、雪穂は勉強があるとかで部屋を出た。

部屋を出る直前、穂乃果をからかうように『ごゆっくり』なんて言葉を口にしていった。

最も、誤解は解けているので、それはちよつとした姉妹の戯れなのだろう。

「良い妹さんだな。それにお母さんの方も。団子もとても美味しいし」

「ありがとう。そう言ってくれると嬉しいな」

僕は先ほどから気になっていたことについて、穂乃果に聞いてみることにした。

「穂乃果。ここだけの話にするので少し、質問をしても良いかな?」

「え、なにになにー?」

「穂乃果はどうして、学院のために頑張っているんだ?」

「私ね。最初は廃校についてそこまで深刻に考えてなかったんだ」

穂乃果が少し笑いながらそう話した。

「廃校のことを知った時は、他の学校に入らないといけないけど、受験勉強全くしてない!……なんてこと考えて、海未ちゃんから、私たち

の卒業まで学院はなくならないって言われた時は安心してたんだ」
「……」

「でもね。やっぱり廃校になるのは寂しいよ……私は音ノ木坂が好きだから。それに廃校が決まっちゃったら、新入生は入らなくなっちゃうし。それってつまり、今の1年生は卒業までずっと後輩がいなくてことになるでしょ？」

「……そうだね」

「それで最初のうちはなんとなく、なんとか出来ないかなって思って、学院の歴史とか伝統とか部活動の実績とかを海未ちゃん、ことりちゃんと一緒に調べてたんだ。でもどれもパツとしなくて……雪穂には強がって見せたけど、心の中じゃどこか諦めてたところがあったんだ」

「穂乃果……」

穂乃果はどこか寂しそうな表情で話を続けた。

「でもそんな時にお母さんが、懐かしそうな様子で昔の卒業アルバムを見てたの」

そう言っつ穂乃果は、卒業アルバムを僕に見せた。

そのアルバムには、卒業証書を持って微笑んでいる生徒や授業中に楽しく笑っている生徒……

運動会や学園祭と思われる様子を写した写真、そして中には、穂乃果のお母さんと思しき人物が堂々とした姿でスピーチをしている様子が写し出されていた。

「それでやつぱり、このままじゃダメだ！つて、廃校を阻止しなきゃって思っつて、気づいたら体が動いてたんだ」

なるほど。穂乃果はそのために今まで……

一見、思いつきな行動に見えるかもしれない。

しかし、彼女なりに廃校を阻止しようと考えていて、学院のことを強く想っている。

その絶対に諦めないと言う姿勢が僕には眩しく見えた。

「僕にも、何か手伝えることはあるだろうか……」

「え？」

気づいたら、そんなことを口にしていた。

声に出すつもりは無かったのだが……

だが、僕のその眩きをはつきりと聞いたのか、突然、穂乃果がこちらに身を乗り出した。

「ほんと！手伝ってくれるの!?!」

「あ、ああ。僕で良ければ……」

「ありがとう!」

僕が咄嗟に口にした言葉に、穂乃果が食いついたようだ。

いきなりの事とはいえ、僕は先ほど発した一言を撤回はしなかった。

何故なら、仮とはいえこんな僕を受け入れてくれたこの学院が廃校になるのは、穂乃果や会長ほどでは無いにしろ、僕もどこか心苦しいと感じていたからだ。

それに……

僕の目の前にいる穂乃果が、先ほどの寂しそうな表情から一変して、輝く笑顔を僕に向けてくれる。

この笑顔を守れるのなら、ここは彼女に巻き込まれてみるのも面白いかも知れない。

高坂穂乃果……

すごく情熱的で、笑顔が素敵な少女だった。

きっと彼女なら、この廃校問題も何かしら解決に導けるかも知れない……

確証はまだ無いが、どこかそういう気持ち僕にはあった。

その後、僕は穂乃果に見送られて、帰宅した……

STAGE 07 動き出す 3人の女神

昼頃……

2年生の授業は午前中で終わった。
なので、僕は下校の準備をしていた。

他の2年生も次々と下校し、その教室は静寂に包まれている。
しかし、その静寂はある1人の少女の声によって破られた……

「ライクーーン!!」

大声で僕の名前を呼ぶその少女の正体は……

「おーい！ ライクーーン!!」

穂乃果だった。

ここまで大声で自分の名前を叫ばれると流石に恥ずかしい……

これ以上叫ばれては堪らないので、僕は少し急いで穂乃果の元に向かった。

「穂乃果、どうしたんだ？ そんな大声を出して」

「今日は暇かな？ もし暇ならちよつと手伝って欲しいことがあるんだけど……」

先日、僕は穂乃果の手伝いをすると約束したばかりで特に用事もないので、その申し出を受けた。

「ああ、構わないよ。それで、今日はどんな手伝いをすればいいんだい？」

「その話をする前にちよつと来て欲しいの。2人にも会わせたいし」

おそらくその2人と言うのは、穂乃果の所属するグループ『μs』の園田さんと南さんのことだろう。

穂乃果を手伝うと言うことは、μsの活動を手伝うことに直結する。

だから、僕も彼女たちと顔を会わせておく必要があるのだろう。

そして、校門前で2人の生徒がこちらを待っていた。

その生徒の1人が穂乃果に向かって話しかけた。

「穂乃果、遅いですよ。一体どこにいたのですか？」

「海未ちゃんごめんね。私たちの活動を手伝ってくれる人を見つけた

の。前に話したでしょ？」

穂乃果がそう言うと、2人の生徒は僕の方を見て一瞬驚いた様に見えるが、僕は気にせず自己紹介をした。

「皇ライだ。これからよろしく」

「南ことりです。よろしくね」

「園田海未と申します。以後、お見知り置きを」

その後、穂乃果達が今日の活動について話をしていると、後ろから何人かの女生徒に話しかけられた。

「ねえねえ、あなた達って確かスクールアイドルでしょ？」

「あ、はい。μ、sって言うグループです」

「μ、sって確か石鹸の……」

「違います」

また石鹸か……

文芸の女神を意味するμ、sが石鹸とどう繋がるのか、本当に分からなかった。

それはさておき……

穂乃果達μ、sの噂は学園中に広まっていた。

日々の地道な活動や、活動内容をネットに載せていたこともあり、μ、sの支持率は一定の層を確保していた。

学院を救う存在として、彼女達の活動を期待している生徒や教師も数人いるそうだ。

最も、副会長はともかく、会長は今のところμ、sの活動を快く思っていないみたいだが……

「今度、ライブやるんでしょう？」

「どんなふうに踊るの？ ちょっとだけ見せてくれない？」

僕たちの目の前にいる女生徒もμ、sに興味があるようだ。

何やら、ここでそのダンスを見てみたいようだが……

「ふっふっふ……良いでしょう！ お客さんにだけ、特別にお見せしましょうー！」

「お友達を連れてきてくれたら、さらにもう少しだけ見せちゃいますよ」

どうやら穂乃果と南さんはやる気のようにだ。

一方、園田さんの方は怯えている様子だった。

おそらく彼女は人前で踊ることに慣れていないのだろう。

穂乃果達が女生徒と会話をしている中で、園田さんはこっそりその場から退散していた。

僕は園田さんの様子が気になったので彼女の後を追ってみた。

.....

園田さんは屋上で膝を抱えて座っていた。

「やっぱり無理です……」

以前、ヒデコ達から聞いた話によれば、どうやら園田さんは人前に立つことに慣れていないらしい。

しかし、スクールアイドルとして活動する以上、それに慣れてしまわないとこの先、厳しいだろう。

とはいえ、穂むらの接客などで店の手伝いをしている穂乃果はともかく……

大抵の人は、何か人前に立つことをしていないと、よほどの人でない限りは誰でも緊張することだろう。

僕の出来る範囲で何か手伝えないだろうか……

僕は園田さんに声をかけてみた。

「やはり、いきなりは難しいかな？」

「はい。せめて人前でなければ出来るのですが……」

やはり、いきなりは難しいか。

どんな言葉を掛けたら良いか迷っていた時、僕の頭の中に何かのイメージが流れてきた……

.....

「ライ、どうしたんだよ。そろそろ新入団員の訓練の時間だぜ」

「ああ。それは分かっているのだが、やはり大勢の団員と顔を合わせ

るとなると、流石に緊張するな…….と思つて」
「大丈夫だつて！ 気にしすぎなんだよお前は。そんなの『野菜』だと思えば良いつて！ まつ、そんなにやりにくいつてんなら、今回は俺が指導役をやつてやるよ」

.....

何だろう？ 今のイメージは……

僕の失くした記憶、なのか？

僕の名前を呼んでいた、あの短気そうな見た目の馴れ馴れしい男は一体誰なんだ？

……それについては後で考えることにしよう。

とにかく今は園田さんを何とかしなくては。

確か『野菜だと思え』とか言っていたな。

僕はそのことを園田さんに伝えた。

「野菜……」

園田さんはそう呟くとしばらく考え込み、そして……

「私に1人で歌えと言うのですか!？」

園田さんはそう言うと言壁に手をつけて怯えていた。

一体、何を想像したのだろうか？

それからしばらくして、屋上に穂乃果と南さんがやつて来た。

「やっと見つけたー。もう、2人とも何やつてたの？」

「実は園田さんが……」

僕は園田さんの悩みを穂乃果達に話した。

「うーん。困つたなあ……」

「でも、海未ちゃんが辛いなら……」

「ああ。せめて、人前でなければ問題は無いみたいだが」

無理強いするのも良くは無いは思うが、出来ればここは少しづつ慣れてもらいたいところ。

そんな中、穂乃果が園田さんの手を取り、そして話した。

「色々考えるよりも慣れちゃった方が早いよ。だから、行こ？」

そして穂乃果に連れられる形で僕たちは街へ向かった。

.....

「よろしくお願いしまーす！」

現在、僕たちは街中でチラシ配りをしていた。

穂乃果が提案した内容とは……

街中で人の多い場所で配ればライブの宣伝になる。

さらに、大きな声を出すことで本番に慣れてしまおうというものだった。

穂乃果と南さんは順調にチラシを配っていたが、その中で園田さんだけはチラシを全く配れていなかった。

「やはり、難しいかな？」

「はい。克服したいと思ってはいるのですが……」

街に出て見知らぬ人に声をかける……

人見知りの園田さんが、いきなり出来る行為では無いだろう。

ここは少し、難易度を下げるべきだろうか？

「確か、『野菜だと思え』……でしたよね？」

先ほど僕が言った言葉を覚えていたらしい。

しかし、僕も咄嗟の思いつきであんな事を言ったため、あまりお薦めはしない方が良いのかもしれない。

「お客さんは野菜。お客さんは野菜。野菜、野菜……」

園田さんは、先ほどの言葉を復唱し始めた。

そして……

「行きます!!」

園田さんはついに動き始めた。

しかし……

「うっ……」

何を想像したのか、彼女の顔に絶望の表情が浮かぶ。

そして、その場でよろけて蹲み込んでしまった……

.....

「これならどうかかな？」

「私は平気よ。けど、海未ちゃんが……」

見たところ穂乃果と南さんは問題無さそうだが、園田さんには少し厳しいようだった。

僕は先ほど考えていた事を穂乃果に提案した。

「穂乃果。ここは少し難易度を下げてみないか？」

「どうするの？」

「チラシ配りを、もう少し人数が限定されている場所でやってみてはどうかな？」

「確かに、海未ちゃんの事を考えたら、その方がいいかも」

南さんが僕の提案に賛同してくれた。

とはいえ問題は、そのチラシ配りの場所なのだが……

「それならとっておきの場所があるよー！」

どうやら穂乃果が何か思いついたようだ。

.....

あの後、僕たちは学院の校門まで来ていた。

なるほど。放課後の校門であれば、そこには下校中の学生ぐらいしかいないため、チラシを渡す客層がある程度は絞ることが出来る。

他人とは言えど、相手は同じ学生。

この条件で、内容をチラシ配りに限定すれば、園田さんほどの人見知りでもある程度は問題無いだろう。

「ここなら平気でしょ？」

「まあ、ここなら……」

園田さんはそう言いつつも、どこか不安がっている様子だった。

「それじゃあいくよー！ ♪ sファーストライブやりまーすー！よろしくお願いしまーす!!」

「ありがとうございますー！ よろしくお願いしますー！」

既に穂乃果と南さんはチラシを配り始めていた。
しかし園田さんは、未だ躊躇っていた。

穂乃果と南さんはライブの宣伝で手が離せないため、ここは僕が
フロローに入るべきだろうか。

「園田さん。僕も一緒に配るから2人で終わらせてしまおう」

「は、はい。ありがとうございます……」

僕は園田さんからチラシを何枚か受け取り、穂乃果達の動作を見様
見真似して配り始める。

「よろしくお願ひします」

「……知らない」

断られてしまった……

やはり彼女達の真似事だけでは、上手くはいかないか。

分かってはいたことだが、少しだけ、ほんの少しだけではあるが虚
しさを感じる。

それにしても、先ほどのツイントールの少女は何処かで見かけたよ
うな気がするのだが……

「皇さん。大丈夫ですか？ 酷く落ち込んでるように見えるのです
が……」

僕はふとそんな事を考えていると、園田さんが声をかけてきた。

別にそこまで落ち込んでなど……いない……筈だ。

だから、何の問題も無いのだ。

とはいえ、彼女の気遣いは純粹に嬉しかった。

「僕は大丈夫だから、取り敢えずチラシを配ってしまおう」

「分かりました」

園田さんは先ほどの僕の様子を見て何か思うところがあつたのか、
その後はスムーズにチラシを配れていた。

結果、穂乃果達は無事にチラシを全て配り終えていたが、僕の方だ
けはチラシが何枚か残っていた……

その原因を穂乃果達に聞いてみると……

「ライ君、動きは良かったんだけど……」

「配っている間、ずっと無表情だったから。それで怖く思っちゃった

子もいるのかも」

穂乃果と南さんがそう評価した。
なるほど。

神楽耶さんにもよく、僕には『笑顔が足りない。笑った顔は素敵なもの』とか言われていたな……

「で、ですが……何枚が残ったとはいえ、きちんと配っていましたよ。受け取っている方も何人かいましたし」

園田さんの気遣いが身にしみる。

結局、チラシ配りに一番適さない人材は、僕だったのかもしれない。ただでさえ、僕は特殊な事例でこの学院に入学して良くも悪くも目立っている。

その僕がこの生徒を怖がらせているようでは、入学を推薦してくれた神楽耶さんや、それを許可してくれた理事長にも申し訳が立たない。

……今度、こっそり笑顔の練習でもしてみるべきか？

「あの……」

僕がそんな事を考えていると、後ろから誰かに話しかけられた。

僕はその声の方角へと振り向いた。

すると、そこには眼鏡を掛けた少女がいた。

「あなたは確か、小泉花陽ちゃん？」

穂乃果がその少女に反応する。

どうやら穂乃果は、その少女と面識があるようだ。

「ライブ……観に行きます」

「来てくれるの？　ありがとう！」

穂乃果がそう言って、嬉しそうに微笑んだ。

僕は、残っているチラシの1枚を小泉さんに渡した。

暫くして4人が楽しそうに話している中、僕はふと、遠くを見た。その視線の先には絢瀬会長がいたような気がした……

STAGE 08 幼 馴染

チラシ配りを終えた後、僕達は穂乃果の家に行った。

AIRISEのライブ映像をパソコンで確認していると突如、
Sのランクが上がったことの通知が入る。

「きつとチラシを見た人が投票してくれたんだよ」
「嬉しいものですね」

2人がランクが上がったことに対して喜んでいると、南さんが大きめの紙袋を手を持って戻って来た。

「お待たせー」

「おかえり。ことりちゃん見て見てー」

「わあ！ランクが上がってる。すごい！」

「ところで南さん。その袋に入っているものは何だい？」

「うん。さっきお店で最後の仕上げをしてもらったの」

その袋の中身は翌日のライブの衣装だった。

その衣装を見て穂乃果はとても喜んでいようだ。

一方、園田さんの方は顔を赤くして動揺していた。どうやら恥ずかしがっている様子だ。

同じ幼馴染でもここまで反応が違うところは少し面白く感じた。

そして園田さんが南さんに詰め寄った。

「ことり。前にも言ったはずですよ。スカートは最低でも膝下までなければ履かないと……」

「そ、そうだよね……」

「だけど、しょうがないじゃん。アイドルだもん♪」

「アイドルだからと言って、『スカートは短く』などという決まりは無いはずですよ」

先ほどのチラシ配りでもそうだったが、園田さんは少し恥ずかしがり屋な面があった。

そのため、スカート丈をやたら気にするのも無理はないだろう。

ふと、園田さんがこの衣装を着た姿を想像してみる。

『大和撫子』の言葉が似合う園田さんが派手なアイドル衣装を身に纏

う。

そのギャップに魅了される人がいたとしても不思議では無い。

僕の視線に気付いた園田さんがやや不機嫌な表情でこちらを見ていた。

「ライ……一体何を考えているのですか？」

「見てみたいと思っただけだ」

「なっ！変な冗談を言わないで下さい！」

「別に冗談で言ったわけではないよ」

「と、とにかく！当日、私は制服で歌います！」

「そ、そんなあ。海未ちゃん……」

「そもそも。2人が悪いんですよ……私に黙って結託するなんて」

どうやら穂乃果と南さんは園田さんに内緒でこの衣装を作成していたようだ。

スカートの短さに異常に反応する園田さんがこのことを事前に知っていれば、何が何でも反対したことだろう。

それを知っているから、2人は直前まで黙っていたのだろう。

園田さんが怒るのも無理はないが、今から衣装を作り直す時間は無い。

さて、どうしたものか……

「だって、絶対成功させたいんだもん……」

「……」

園田さんは立ち去ろうとしたが、穂乃果の一言で足が止まる。

「ここまでずっと頑張ってきたんだもん。みんなをやってきて良かったって、頑張ってきて良かったって、そう思いたいの」

「穂乃果……」

そして穂乃果は部屋の窓を開け、外に向かって大声で叫んだ。

「思いたいの一！！」

「何をしているのですか!?!近所迷惑ですよ」

「でも、私も同じ気持ちよ」

「ことり……」

「私も、3人でライブを成功させたいな」

「いつもいつも……ずるいです」

「海未ちゃん……」

そして、園田さんは覚悟を決めたようだ。

「……分かりました。ですが、次からは事前に話して下さいね」

「海未ちゃん……ありがとう！大好き!!」

穂乃果が園田さんに抱きついた。

その様子を見て南さんは微笑んでいる。

……幼馴染とは良いものだな。

僕はそんな3人の姿に、以前夢で見た2人の少年と1人の少女を重ねていた。

全く知らない人物だと言うのに、彼らのことを思うと不思議と暖かい気持ちになる。

僕は記憶を失う前、彼らとはどういう関係だったのだろうか？

僕が全てを思い出した時、彼らと出会うことは出来るのだろうか？

……

その後、僕たちは夜遅くではあるが、とある神社にてお参りをしていた。

「どうか、ライブが大成功しますように」

「緊張しませんように」

「みんなが楽しんでくれますように」

「二よろしくお願ひします！」

3人が今度行うライブについて、その成功を願う。

僕も彼女達と同じように翌日のライブの成功を願った。

……

そして、帰り道……

僕は願ひ事について、あの夢の出来事を思い出していた。

『みんなが僕を忘れますように』

随分前に夢で見た、とある少年が発した願いだ。

その少年を助けてくれた大切な人達のことを思い、発した一言。ただ願うだけで皆、その少年のことを忘れてしまうものなのだろうか？

普通、ただ願っただけでは自分という存在を忘れさせることなど不可能だろう……

だが、もしそれが出来るとしたら、僕ならどうする？

例えば、記憶を失う前の僕が、穂乃果達に危害を加えるような危険な存在だったら？

もしそうなら……

僕は……

「ライ」

僕は考え事をしている最中、園田さんに話しかけられた。

「園田さん、どうかしたかい？」

「今日はありがとうございます」

「ん？ 何の話だ？」

「チラシ配りの件で色々と助けていただいたことです。色々アドバイスを頂いたり、校門では不器用な振りをしてまで私を励ましてくれた事……感謝しています」

いや、校門で僕がほとんどチラシを配れていなかったのは振りではなく、単なる僕の実力不足だったのだが。

あの少女には真っ先にチラシを断られたし……

とは言え、自分からそんなことを言うのも少し恥ずかしかったのでそのことは指摘しないでいた。

別に気になっているわけでは無いが、あの時のことは出来れば思い出したくない。

それに……

あれは彼女が勇気を出したからこそ出来たことだ。

僕はただ、ほんの少し手伝っただけに過ぎない。

だけど、園田さんの感謝の気持ちは嬉しかった。

「ことりから聞いたのですが、確かライは記憶喪失でしたよね？」

「ああ」

なぜ南さんがそれを知っているのか？ と一瞬思ったが、おそらく理事長にでも聞いたのだろう。

副会長から以前聞いたが、南さんと理事長は親子なのだそうだ。

「今回のお礼もしたいですし、今回の件が落ち着いたら、私もライの記憶探しを手伝います」

「いや、そこまでしなくても大丈夫だよ。記憶の方は今の所、僕だけで何とかかなりそうだから」

「ですが……」

僕がそう伝えても、園田さんは納得しないようだ。

「もし本当に困ったことがあったらその時は、園田さんに相談しても良いかな？」

「はい、そのくらいでしたら喜んで。それとライ？ 私のことは海未で良いですよ。私も貴方のことを、気づいたら名前前で呼んでいましたし」

「ならそうしよう……海未。これからもよろしく」

「はい、よろしくお願いします。ライ」

園田海未……

最初は恥ずかしがり屋で人見知りが激しく、アイドルには不向きな少女だと思っていた。

しかし、それは彼女のことを碌に知らない僕の勘違いだった。

彼女の人を気遣う優しさ、そしてその真っ直ぐさには人を惹きつける魅力がある。

そして、そんな彼女のことを好きになり、支える人たちがいる。

海未はこれから、スクールアイドルとして着実に成長していくことになるだろう。

STAGE 09 ファースト ライブ

チラシ配りの翌日、新入生歓迎会が開催された。そして放課後には部活動紹介も控えている。

μ'sのファーストライブは放課後に行われる。

僕は生徒会補佐として、備品の運び出しや各部活動紹介の準備などの作業に駆り出される予定だ。

生徒会長や副会長の考えとしては、僕が様々な部活動の手伝いをしていくことで生徒から、

僕に対する警戒心を減らしていこうというものだ。

僕もこれから音ノ木坂の生徒として過ごしていくのだから、いつまでも女子達に警戒されたままでは流石に居心地が悪い。

だから、僕はその提案を引き受けた。

幸い、僕に対する女子生徒の反応は思いの外、悪くは無かった。

僕が警戒されていない理由として考えられること。

それは、大多数の生徒から支持されている絢瀬会長や東條副会長の依頼で僕が動いていることにある。

彼女達の下で働くからこそ、僕のような得体のしれない存在を皆、受け入れてくれたのだろう。

それだけ、生徒達の会長達に対する信頼は厚い。

また、東條先輩が言うには僕は美形という部類に入るらしい。

それで警戒している生徒があまりいないのだと言っていた。

しかし、僕はその考えに対しては疑問があった。

美形というだけで、この生徒がそう簡単に警戒を解くとは、あまり思えなかったからだ。

そして話は変わるが、美形というのなら僕よりも、もっとそう呼ばれるに相応しい人間がいるはずだ。

例えばそう……

最近よく見る夢に出てくる2人の少年。

彼らこそが、その部類に入るだろう。

この生徒達が彼らと出会ったら、僕と同じことを思うことに違い

ない。

それにしてもやはり、よく憶えている。

所詮、夢で見た光景なので、名前までは分からないのだが……

……

僕は手伝いの途中で、チラシ配りをしている穂乃果達に会った。

彼女たちの様子が気になり、声をかけた。

「穂乃果、調子はどうだい？」

「あっ！ライくん。こっちは大丈夫だよ」

僕はその様子に安心しつつ、つい海末の方が心配になり様子を見つめる。

「よろしくお願いしまーす！ ありがとうございます！」

しかし、僕が心配する必要もなく、彼女のチラシ配りは順調そうだった。

「これもライくんのおかげよ」

南さんはそう言うが、僕は特に何もしていない。

「南さん、僕は……」

「ことり」

「え？」

「穂乃果ちゃんや海未ちゃんには名前で呼んでいるのに、私だけ苗字はちよっと……」

なるほど。今のところ3人の中で唯一、名前で呼んでいないのは南さんだけだ。

別に気にするほどでもないのでは？

一瞬そう思ったが、他の2人と違って自分だけ苗字呼びなのが妙な疎外感を感じてしまうのかも知れない。

「分かった。次からは、『ことり』って呼ばせてもらおうよ」

「うん♪」

ただ名前を呼ぶだけの行為なのに、少し恥ずかしい……

僕は誤魔化しの目的も兼ねて、穂乃果にあることを尋ねた。

「そう言えば、ライブは歓迎会の後にやるんだったな。準備は万全かい？」

僕がそう尋ねると、穂乃果が自信満々に答える。

「うん。バッチリだよ♪ この日のために頑張ってきたし」

穂乃果の自信満々の答えだが、僕はどこか不安だった。

不安の原因、それは……

穂乃果たちが行うライブは、歓迎会が終了した後……

そして各部活動が勧誘を開始するのも丁度その時間だ。

ライブと部活動勧誘の時間が被ってしまう……

多くの生徒がそれぞれ興味のある部活動を見学するだろう。

そして既に部活動に所属している先輩方はその対応をしなければならぬ。

それぞれの部活動勧誘、それによつて生徒達が賑わう中……

果たして、ライブを観に訪れる生徒がどれだけ残るのだろうか？

杞憂だといいいのだが……

もちろん、穂乃果達のライブを他の部活動よりも優先する生徒もいる筈だ。

僕はその可能性を信じることにした。

「ライブも来ていたのですね」

僕が物思いに耽つていると、不意に海未から話しかけられた。

「ああ。海未の方は順調そうだね」

「はい。昨日のライの様子からヒントを得て、

私なりに動いてみたら思いの外、出来るようになりました」

そう言つて、自然な笑顔で僕に向けてくれた。

僕は昨日、何度か心配したが、今の彼女なら特に問題は無いだろう。

僕は、海未の笑顔を見てそう思った。

.....

新入生歓迎会は終了した。

そして部活動勧誘も順調に進んでいる中、僕も仕事を終えたところ

だ。

さて、ライブまでにはまだ時間があるので、部活動の様子でも見てもみようか。

先ずは中庭あたりまで行ってみようと足を動かした直後、絢瀬会長を見かけたので声をかけてみた。

「会長。どうかしたんですか?」

「皇くん? ごめんなさい。今ちよつと忙しくて……」

会長は何やら重そうな機材を運んでいる途中だった。

「もし良ければ、僕が運びますよ」

僕がそう提案すると、会長は少し考えた後、僕に機材を預けてくれた。

「ありがとう。正直これちよつと重くて……」

放送室まで運んでくれると助かるわ」

「分かりました」

そして僕と会長は目的地である放送室に到着した。

「助かったわ。ありがとう」

「いえ、これくらいでしたら。それにしても、この機材は何に使うんですか?」

「それは……」

何気ない疑問を口にしたただだったが、会長は返答に困っていた。

会長の目が『聞かないで欲しい』と語っていたよう気がした。

「話しづらい事でしたら、話さなくて大丈夫ですよ。少し気になっただけですから」

「ごめんなさいね……ここまで手伝わせておいて、何も言わないなんて」

「いえ、僕が勝手にやった事ですから」

僕としても、ただの好奇心で聞いた事だったから、無理に事情を聞く必要もない。

それに彼女が言い渋る原因はある程度は予測できた。

原因はおそらく、μ、s絡みのだろう。

μ、sの話をする時、会長は不機嫌になることが多い。

僕が色々と考えていると、会長が話しかけてきた。

「皇くんはこの後、どうするの?」

「僕は講堂へ行ってみようと思います。穂乃果たちがライブをするらしいので。」

会長はこの後、どうしますか?」

『もし良ければ一緒に講堂まで行きませんか?』とは言えなかった。別に誘うのが恥ずかしかった訳ではない。

μ、sの話題を会長の前で出すと、彼女はどこか不機嫌で、あるいは少し寂しそうな……

そんな表情になったりした。

なるべくなら彼女にそんな表情はさせたく無い。

理由はよく分からなかったが、自然とそんな風に考えていた。

「私は一旦、生徒会室に戻るわ。希もそこにいると思うから」

僕は副会長の名前が出た時、ふと考えた。

彼女はμ、sのことを、どう思っているのだろうか?

彼女達のグループに『μ、s』という名前をつけたのは副会長だ。

このことや普段の態度から分かるように、少なくともμ、sに敵意は持っていない。

しかし、表立って穂乃果達に協力している訳では無いようだ。

おそらく会長を気遣っているから、あまり表立っての行動は出来ないのだろう。

僕は長考していると、会長が時計の方に視線を向けた後、今度はその視線を僕に向けて話した。

「考え事の邪魔をして悪いのだけど……」

そろそろ行かないとライブ、間に合わなくなっちゃうわよ?」

「それもそうですね。それでは僕は行きます」

「ええ。楽しんでいらっしやい」

「はい」

絢瀬会長……

とても優しい人だが、μ、sや廃校関連の話になると

まるで人が変わったように、厳しい表情を見せる。

しかし、学院に対する想いは誰よりも強く感じた。
それは、まるで何かを背負っているかのようにも感じていた……

……

生徒会室を後にして講堂に向かう途中、

なにやら慌てている様子の小泉さんとその傍に活発そうな短髪の少女を見かけた。

「どうしたんだい？ 2人とも」

「あつ、皇先輩」

「かよちん。この先輩と知り合いにや？」

……にや？

いや、それはともかく、小泉さんはライブを観にいくところのあいだ
言っていたが、

ここで何をしているのだろうか？

もしかすると講堂に向かう間に、道に迷ったのだろうか？

「小泉さん。μ sなら講堂でライブをしているはずだ。急げば、ま
だ間に合うよ」

「ほ、本当ですか？……良かったあ」

「かよちん。ライブを観に行きたいならもつと早く言ってくれば良
かったのに」

どうやらこの2人は仲が良さそうだった。

見た所、2人ともこれからライブを観に行くようだ。

僕と目的は同じなので、ここは一つ提案してみる。

「僕も今から講堂に向かうところなんだ。」

もし迷惑でなければ、案内するから一緒に行かないか？」

「は、はい。よろしくお願いします」

「かよちんが行くなら、凜も行くにや」

そして僕たちは、講堂へ向かった。

……

「着いた……時間は？」

廊下だと言うのに全力疾走して何とか講堂までたどり着いた。

「時間は……少し過ぎてしまったか。」

とはいえ、まだタツチの差だから今からでも大丈夫な筈だ。

扉を開け、僕たちは中に入った。

しかし、何か様子がおかしい。

「あれ？ ライブは？」

小泉さんが不思議そうに周りを見渡す。

そこには、ライブの宣伝をしていたヒデコ達3人はいたが、

観客は僕たち以外誰もいなかった。

穂乃果達の方を見ると、立ちすくんでいた。

無理もない……

今まであれだけ頑張ってきたその結果、僕たち以外、誰も来なかつ

たのだから。

僕はそんな彼女の姿を見ていられなくなり、思わず声をかけた。

「穂乃果！」

「ライ、くん？……それに花陽ちゃんと凜ちゃんも」

どうやら、僕たちに気付いたようだ。

そして穂乃果は僕たちに語りかけるように呟いた。

「私たち、今まで頑張ってきたつもりだった。」

「けどそんなに甘くはないってことを知った……だから」

穂乃果は先ほどの悲しみの表情から一変して、

「ライブ……しよう！ そのために今まで頑張ってきたんだから！」

穂乃果はそう決意する。

「歌おう。全力で！ 今までを無駄にしないために！！」

そして、穂乃果の決意を聴き、海未とことりも覚悟を決める。

「穂乃果。私も歌います……全力で！」

「私も同じ気持ちよ。穂乃果ちゃん」

彼女達は、僕たちの姿を確認し、改めてライブをすることを決意し

た。

そして……

観客が少ない中、3人は歌う……

彼女たちの歌う姿には、儂さが現れた。

しかし、それと同時に、その姿には熱い想いと力強い情熱を感じた。

僕は暫しの間、そんな彼女たちの姿勢に見惚れていた。

そしてライブの最中、2人の少女の姿を確認した。

1人は講堂に遅れて入って来た西木野さん。

そして2人目は、先ほどは気づかなかつたが、椅子の近くで蹲み込んでいる少女……

恐らく、ライブが始まる前からずっといたのだろう。

彼女達もまた、μ'sのライブに惹かれて集まって来たのだ。

もしかすると、会長と副会長もどこかで、この光景を見ているのかも知れない。

……

ライブも終わり、会場にいた者は皆、穂乃果たちに拍手を捧げた。僕もみんなに合わせて拍手を重ねる。

講堂の席に隠れている少女は、拍手こそはしていないが、感動している様子ではあった。

そして講堂の扉が開き、そこから会長が入って来た。

会長は真剣な眼差しで穂乃果たちに問いかける。

「貴女たちはこれから、どうするつもり？」

会長が穂乃果たちの今後の行動を確認する。

「続けます！」

「何故？ これ以上続けても意味は無いかも知れないわよ。それでも、続けるつもり？」

「はいーだって、もっとライブをやりたいから!!」

穂乃果は真剣な眼差しを会長に向けて告げる。

これからもたくさん歌いたいと告げる。

そして海未とことりも同じ気持ちであると。

3人は今回のライブで芽生えた気持ちを信じている。

例え誰からも応援されなくても、見向きすらされないとしても……
それでも、頑張って自分達の想いを届けたいと。

このライブを行ってあらためてそのことに気づけたこと……

会長だけでなく、この場にいる全ての者にそう告げた。

「そしていつか必ず、この会場を満員にしてみせます!!」

穂乃果は高らかに宣言する。

会長はその宣言を、先ほど変わらない表情で、

そして真剣な表情で聞いていた……

STAGE 10 青と蒼 前編

ある日の放課後……

僕は校内を出歩いてみると、とある空き教室から声が聴こえてきた。

「みんなー！　ありがとうー♪」

中を見てみると、そこには海未が1人でその掛け声とともにポーズをとっている姿を見かけた。

ライブの練習だろうか？

邪魔をしては悪いと思い、僕はそつと扉を閉じ踵を返した。

突如、教室の扉が勢いよく開かれた。

何事かと思い振り向くと、海未が物凄い形相で僕に迫ってきた。

「……見ましたね？」

「『見ていない』と言ったら？」

僕はその形相に気圧され、咄嗟に誤魔化しの台詞を口にする。

しかし……

「つまり『見ていた』と言っているようなものですね……フッフ」

さすがに誤魔化せなかったようだ。

やがて海未は不敵に笑みと共に、僕に話しかけてきた。

「ライ、少しお話ししましょうか……」

その表情は笑顔ではあったが、目が笑っていないかった……

どうやら僕に拒否権はないようだ。

……

「ど、どうか！　この事はご内密にお願いします」

先ほどの様子とは打って変わり、海未は僕に懇願した。

「ああ。言いふらす趣味はないから安心して」

「あ、ありがとうございます！」

「礼には及ばないよ。それはそうと、先ほどのライブの特訓かい？」
「はい……お恥ずかしい姿を見せてしまいましたね」

「別に恥ずかしくはないんじゃないか？ ライブの特訓をすること自体は良いことだと思うが……」

「そう言っていただけのことでは嬉しいのですが、やはり人に見られるのは恥ずかしいですね……」

確かに、普通は一人で特訓をしている姿を誰かに見られれば、誰でも恥ずかしいと感じるものだろう。

もしもこの先、この特訓で下手に邪魔が入ろうものなら、今後のライブなどに何か悪影響が出るかもしれない。

僕はそう考えたところで、ある提案を海未にしてみた。

「海未。もし良かったら今後、特訓をするときは僕を呼んでくれないか？」

「な、何故ですか？」

海未が少し動揺しているが、僕はそのまま話を続ける。

「空き教室で誰にも見られずに特訓したいなら、扉の前にも見張りをつけるべきだ」

「それは……そうですね」

「だから、その見張りを僕が引き受けよう。それくらいなら僕にも出来ると思う」

「そ、そんな！ そこまでしてもらうのは悪いですよ。それに、ライは生徒会の仕事や記憶探しのこともあるのでしよう？」

確かに、記憶のことや生徒会での仕事があることを考えると、海未の特訓を手伝える時間は無いのかもしれない。

「ですから、ライは自分のことを優先すべきです」

だが……

僕には、このように気遣ってくれる海未に対する感謝の気持ちがあつた。

海未は恥ずかしがり屋で人見知りなところがある。

その性格もあり、このような特訓を皆に内緒で行うこともあるのだろう。

だが僕は、目標のためにこうして努力を欠かさない、そんな彼女の姿に感心を覚えていた。

……その真面目な姿勢が、どこか『彼』に似ている気がするから。だから、些細なことかもしれないが、彼女の力になってみたいと思っただ。

「確かに海未の言う通りかもしれない……それでも手伝いたいんだ。駄目かな？」

「そ、そこまで言うのでしたら……」

海未はまだ納得はしていない様子ではあったが、とりあえず了承してくれた。

……

その後、僕たちは特訓の段取りを話し始めた。

適した時間帯や僕たちのそれぞれの用事なども考慮して、スケジュールを作成した。

「これで一通りは決まったな。あとは、特訓中に人が来た場合の合図だが……」

「でしたら、携帯を鳴らしてはどうでしょうか？ 特訓中でも、着信音には気付くと思いますから」

確かにいい考えではあるが、これには致命的な欠点があった。

「それなんだけど……実は携帯電話を持っていないんだ」

「そうなのですか……ちなみに今まで、ご友人やご両親への連絡はどうしていたのですか？」

「この学院に来る前は友人と呼べる人は1人もいなかったし、神楽耶さんへの連絡も家の固定電話からしていたから。携帯は特に必要はなかったんだ」

「そ、そうなのですか……」

すると海未は、哀れむような表情で僕を見てきた。

先ほど『友人は1人もいない』などと言ったからだろうか？

「それでしたら今度、一緒に買いに行きませんか？」

そして海未は、僕にそう提案した。

「僕としては助かるが……良いのか？」

「はい。今回のことでお礼もしたいですから。それに……ライはこの街にはあまり詳しくないのでしよう？」

海未の指摘の通り、僕はこの街には詳しくない。

この学院に最初に来た頃は、地図を確認しなかったこともあり迷子になったこともある。

ここは、彼女の提案に乗ってみるか。

「折角ですから、お買い物が終わった後に街をご案内します。もしかしたら、街を散策することで、何か記憶の手掛かりになるかもしれないですよ」

「そうだな……迷惑でなければ、お願いするよ」

「私も丁度、街の方で用事がありますから、迷惑などではありませんよ。それに、貴方の記憶のことは、私も気になっているので……」

海未はそう言ってくれた。

ここは素直に、彼女の厚意に甘えてみよう。

「海未……ありがとう」

「いえ……そうしましたら、日にちはいつにしましょうか？ なるべく早い方が良いと思いますが……」

「そうだな……それでは、今度の休日は空いているかな？」

「はい。問題ありませんよ」

それから僕たちは今後の予定について話し合った。

.....

一方、その頃……

「ふっふっふっ……良いこと聞いちゃった♪」

夕暮れに染まる学院の廊下で、1人の少女がいたずらに微笑んだ。

.....

そして約束の休日。

早朝から駅前にて待ち合わせとなった。

ルートとしては、早朝の人の少ない時間から街中を散策してその後、携帯ショップに向かおうというものだった。

このように当日の予定をきちんと決める海未の真面目さには、素直に感心する。

僕も、彼女の真面目さを見習うべきだろうか？

色々と考えている内に、待ち合わせの駅までたどり着いた。

そこには既に海未がこちらを待っていた。

「すまない……待たせてしまったな」

「いえ、私も今来たところですから……それでは行きましょう」

「ああ」

.....

一方その頃……海未とライの様子を見ていた2人の少女が話をしていた。

「穂乃果ちゃん……やっぱりこういうのは良くないんじゃないかな？」

「でもでも！　ことりちゃんも気になるでしょ？」

「確かにちよつとは気になるけど……やっぱり、これってデートなのかな？」

「絶対そうだよ！　2人とも、いつの間にそんな関係に……」

「あっ！　海未ちゃんたちが歩き出したよ」

「よし！　2人を追いかけよう!!」

「う、うん……」

後を付ける気満々の穂乃果に対し、ことりはそれほど乗り気では無かった。

（良いのかなあ……こんなこととして）

しかし、それでも2人の関係は気になっている様子ではあったので穂乃果の後に付いていった……

……

海未と僕は携帯ショッピングが開店するまでの間、街中を散策していた。

周辺を歩いて暫しの時間が経過する。

どこか気恥ずかしさもあつたため、それまでお互い無言でいたが、やがて海未の方から話し始めた。

「ここまでで、何か気になったことはありますか？」

「そうだな……」

そう言われて、少し考える……

色々と街中を見渡してみたが、記憶の手掛かりについては何も感じない。

だが、それでも気になるものはあつた。

「先ほどからよく見かける、あの丸いカプセルが入ったマシン……あれが少し気になった」

「ガチャガチャのことですね。お金を入れ、レバーを回すことで中に入っている商品が出てくるものです」

「そうなのか……」

ガチャガチャか……

注目していたわけではないのだが、道中に次々とそのマシンを見かけるものだから、つい視線が移ってしまった。

「そこまで気になるのですら、1度回してみますか？」

「そうだな。折角だからやってみよう」

僕はその『ガチャガチャ』とかいうマシンにお金を入れ、レバーを回転させた。

すると、不思議な音と共に下の取り出し口からカプセルが出てきた。

そのカプセルを開けると、中には玩具のようなものが入っていた。

「どうやら、レアな物が当たったみたいですね」

「レア？」

「はい。ライが今当てた物は、普段はあまり出てこないものなんですよ」

「へえ……」

「それにしても……」

海未が片手を顎に添えて、なにか考え事をする様子で一言つぶやいた。

『記憶喪失』というのは、そういうことまで忘れてしまうものなのですね……」

「うーん。どうだろう……生活に必要な知識は一通りあるんだけど、『ガチャガチャ』というものは初めてみたな」

「なるほど……それはそうと、授業の方は何か問題はありませんか？」

理解の度合い……といった意味ですが」

「さて、不思議と困らないな。ただ……」

「ただ？」

海未がそう聞き返してきた。

元々の僕が勤勉な性格だったのか、授業については問題なく付いてくれた。

2つの教科を除いて……

「地理と歴史だけは、理解するのに時間が掛かった」

「地理と歴史……ですか？」

「うん。他の教科については知識が、必要に応じて引き出しからすらすらと出るような感じがあるのだが、今挙げた2つの教科についてはそれが曖昧になるんだ」

「なるほど……ですが、先日の歴史の小テストの結果を見る限りだと、少し意外に感じますね」

もともと、その事実が判明した後、その2つの教科を集中的に勉強したから、今となっては問題は無い。

そのことを海未に伝えたら、安心した様子で一言を発した。

「それは何よりです。それにしても、ライは真面目ですね」

海未がそう評価した。

しかし、僕にとつては海未の方こそ真面目な人間に見えていた。

「……こういうことを疎かにすると、自分がやりたいと思うことができなくなる」

「良い心がけだと思います」

「と言つても、今のは僕の言葉ではないのだけど……」

僕はそこまで真面目な人間ではない。

面倒だと思つたことはやらないこともある。

歴史等の学習についても、必要だと判断したからそうしたまでだ。

「今みたいなことを言つた友達が……いたような気がするんだ」

「良い友人ですね」

「ありがとう。だけど相変わらず、それが誰なのか分からないんだけどね……」

記憶を失う前にいたはずの僕の友達……

そして現在、僕の目の前にいる園田海未という少女もまた、自分の目標のために努力を惜しまない人物なのだろう。

記憶を失くす前の僕は、海未や『彼』のような目標があつたのだろうか？

それを探すよりも、今から何か目標を作るべきだろうか？

それからしばらく僕たちは無言になった。

やがて、携帯ショップの开店時間が近づいてきた。

「そろそろかな？」

「はい。では行きましようか」

それから僕たちは、携帯ショップまで向かつた……

STAGE 10. 5 青 と 蒼 後編

僕と海未はあの後、携帯ショップの店内に入った。

この店には初めて入るので、右も左も分からない状態であった。しかし海未の助けもあり、なんとか機種をいくつか絞ることができた。

「こちらはどうぞでしょうか？」

海未が1つの機種を手に取り僕に薦めてきた。

「うーん。悪くはないが……少し値段が高い気がする」

「言われてみればそうですね……それでは、こちらはいかがですか？」

海未はそう言つて、次の扱いやすそうな機種を薦めてきた。

「うん。これなら良いかも。値段も手ごろだし……それに色が綺麗だな」

「色……ですか？」

「ああ。深い『海』のような青……こういう色は好きだ」

「そ、そうですか……」

僕がそう言うとなぜか、海未が頬を赤く染め、その顔は少し俯いていた。

熱でもあるのだろうか？

僕は海未が心配になり声をかけた。

「海未？ なにやら少し顔が赤いけど……大丈夫かい？」

「だ、大丈夫です！ 何でもありません……」

海未は少し動揺した様子でそう答える。

しかし、ふらついた様子も無いので彼女の言葉に納得することにした。

「そつ、それでは、手続きの方を済ませてしましましょう」

「ああ……分かった」

そして、海未が選んでくれた機種を選択し、携帯の契約手続きに入った。

.....

「ありがとう。海未のおかげで助かったよ」

「いえ.....このくらい、なんでもありませんよ」

海未はそう言うてくれたが、携帯の件や記憶探しの件もあり、僕は海未に世話になりっぱなしだった。

この恩は取り敢えず、彼女の特訓を手伝うことで返すことにしよう。

「操作方法については問題ないですか？」

携帯の操作については、説明書を熟読したこともあり、問題なく操作できる。

「どうやら、こういった機械類の操作は得意なようだ。」

「ああ。問題なく使える」

「それはなによりです.....それでは早速、連絡先を交換いたしまししょう」

そして海未の携帯に自分の携帯をかざし、連絡先を交換した。

「これでいいかな？」

「はい、これで完了です。それにしても.....ライは不思議ですね」

連絡先交換が完了した直後、海未はそう呟いた。

不思議か.....

そう言われたのは初めてだな。

何故そう思うのか気になったので聞いてみた。

「どの辺が不思議だと思ったんだ？」

「そうですね.....1つは、記憶を失くしているのに、それでいてどこか落ち着いているところでしょうか.....」

「.....なるほど」

「もう1つは.....ライは最近、何か鍛錬などの経験はありませんか？」

海未にそう言われ、心当たりがないか考える.....

しかし、ここ最近で鍛錬などしてはいないし、そういった記憶も

戻っていない。

「いや、特にないな」

「そうですねか……これは、先日の特訓の時に気付いたことなのですが……」

おそらく僕が海未の練習を始めて目撃した日だろう。

あの時、僕は何かをしていただろうか？

僕はそう考えつつ、続けて海未の言葉を待った。

「私が扉を開けたとき、ライはこちらを向きながら、右足を後ろに引いて間合いを取っていましたよね？」

「……僕がそんなことを？」

「はい。普通の人なら振り向くとき、ただ顔だけをこちらに向けるものですが……貴方はまるで、日ごろの鍛錬のようなもので刷り込まれたムダのない動きのようでした」

もちろん僕にはそんな意識はなかった。

鍛錬の記憶か……思い出せない。

しかし、新しい切り口にはなるかもしれない。

「ライはもしかしたら、記憶を失う前は日常的に何かの鍛錬をしていたのだと思います」

海未がそう推測した。

それにしても、海未の観察力も凄いものだった。

知り合ってから、まだそんなに日が立っていないというのにこの分析力……

もしかしたら、今後も彼女と接していくことで、記憶回復の手掛かりがつかめるかもしれない。

もう少し話してみるべきか……

「そういう海未の方こそ、何かやっているのかい？ 僕の動作に気付ける君も何か鍛錬をしているのだと感じるが……」

「そうですね。と言っても私の場合はおそらく、ライとは違った鍛錬になると思いますけれど……」

そう言うと海未は暫し考え込んだ後、やがて話し始めた。

「私の実家は日本舞踊の家元ですので、日ごろからその稽古をしてい

ます。他には、弓道部の練習もしていますね」
「凄いな……」

海未は日ごろの稽古に加えて、μ、sの活動もあるのだ。
並大抵での努力ではそこまでは続かないだろう……
毎日それだけの量をこなして疲労がたまっただけではないだろうか？
僕はそれが気になったので聞いてみた。

「確かに、稽古やμ、sの練習が続くとさすがに疲れます。ですが、ちゃんと息抜きの時間も取っていますよ」

「例えば？」

「そうですね……先ずは、穂乃果やことりと出かけたりしています」

海未はこの言葉の後に、『今こうして、ライと出かけることも息抜きになっっていますよ』と言ってくれた。

こうして彼女を連れまわすことが何か負担になっっていないか心配だったが、息抜きになっているのなら幸いだ。

「他には……読書をしていますね。特に小説などはついつい感情移入してしまうことがあります」

「読書というのはそんなに面白いのか？」

「はい。もともと、小説などは読んでいるうちについつい感情移入してしまい、感情が昂ぶって疲れてしまうこともあります……」
読書か……

落ち着きたいときには、丁度いいかもしれないな。

「よろしければ今度、お勧めの本をお貸ししましょうか？」

「そうだな……お願いするよ」

海未は稽古やμ、sの練習を両立していて、根を詰めすぎて疲労がたまっっていないか不安ではあったが、今言っただような息抜きもちゃんとしているようで安心した。

話も一通り終わったところで、僕は先程から感じていた気配の正体に声を掛けた。

「さて『二人とも』……僕たちに何か用事かな？」

「はい？」

「……………!!」

僕のその言葉を聞いた瞬間、後ろの物陰から2人の少女が現れた。

「海未ちゃんにライ君……………ぐ、偶然だね……………」

穂乃果がとつさに誤魔化そうとするが、それは通じない。

「穂乃果？ それにことりも……………2人して、どうしたのですか？」

「えつと……………これはその……………」

……………

「全く……………2人とも何をしているのですか？」

「だって……………海未ちゃんとライ君が私たちに内緒でデートなんてするから」

「私も、ちよつと気になっちゃつて……………」

「デート？」

なるほど……………

若い男女が休日に2人きりで歩いていたら、普通はそう感じるものなのだろう。

僕としては、そんな意識はなかったが……………

「違うの？」

「違う……………」

「ち、違います！ デートではありません!!」

穂乃果の答えに僕が反応する前に、先に海未が否定した。

「だけど2人とも良い雰囲気だったよね？」

「うん、うん！ 特に海未ちゃんなんて、さつき携帯シヨップにいたときに、すごく可愛い顔してたし！」

携帯シヨップと言えば確か……………海未がなぜか頬を赤く染めていたことがあったな。

あの様子は確かに可愛かったと思う。

僕がその時の海未の様子を振り返っていると……………

「い、一体……いつから見えていたのですか？」

「えーとね……2人が待ち合わせするところからだよ♪」
「……」
「……」

つまり最初からいたということか……

僕たちを付け回した動機として考えられることは、単なる好奇心、あるいは海未が心配だったというところだろうか？

「それである時、どんな話してたの？ 教えて！」

「えっと……あれは確か……」

「何でもありません！ ライも答えなくて良いですから……」

「そ、そうか……分かったよ」

僕が覚えている限りのことを答えようとすると、それを海未に遮られた。

すると、穂乃果が不満そうに海未を見つめる。

「え〜……海未ちゃんのケチ」

「拗ねたって駄目です。教えませんからね！」

まあ、下手にあの時の会話を教えたら、海未の特訓のこともバレるかもしれないな。

とはいえ、このまま何も話さなければいらぬ誤解を受けることになるだろう……

「穂乃果、実は……」

僕は『特訓』の件は伏せつつ、今日のことを話すことにした。

……

「……と、言うことなんだ」

あれから……

海未と僕は2人の誤解を解いた。

僕が携帯を持っていないこと……

それを知った海未が『一緒に買いに行こう』と提案してくれて、そのついでに記憶探しの手伝いをしてくれたこと……

『特訓』の件は知られないように注意して、2人に事情を説明したがう

まく隠せただろうか？

「なくんだ。そういうことなんだね。海未ちゃんとライ君、凄くいい雰囲気だったから勘違いしちゃった」

「全くもう……それで、2人はどうして私たちが出かけることを知っていたのですか？」

「おそらく、この間の会話を聞かれていたんだろう……. どうかな？」

『この間』というのは、先日の特訓の日のことだ。

やがて、穂乃果が答え始めた。

「えへへ……. 実はそうなんだ！」

「ど、どこまで聞いていたのですか？」

海未が不安そうにそう尋ねる。

『特訓』のことがばれていないか、気になるのだろう。

「えっとね……. 確か、『貴方のことは、私も気になっているので…….』のところから？」

「そ、そうですね」

穂乃果の答えに海未がホッと胸を撫で下ろす。

どうやら『特訓』の内容までは知られていないようだ。

それはそうと、先ほどの穂乃果が言っていた海未のセリフは『貴方の記憶のことは、わたしも気になっていたので』だったのだが…….
彼女が聞き取った言葉だけだと、確かに恋人のやり取りのように聞こえても不思議ではないかもしれない。

.

「それにしても、ライ君の記憶かあ…….」

あれから海未と僕の誤解も解け、僕たちは帰り道の途中で寄った、ある公園で談笑していた。

やがて、話題は僕の記憶のことになった。

「今日は何か手がかりが見つかったの？」

「ことりがそう尋ねてきた。」

とはいえ、記憶のことについては、僕自身は何も感じなかった。僕はそのことをこどりに伝える。

「そうなんだ……」

すると、こどりが心配そうな表情を見せていた。気を遣わせてしまっただろうか？

「もつとも、海未の方は何か気付いたみたいだけどね」

「そうなの？ 海未ちゃん」

穂乃果が海未にそう尋ねる。

「ええ。私が気付いたのは……」

そして海未は先ほど指摘していた、僕の癖について話し始めた。すると、2人は僕のある『癖』について知ると驚いていた。

「すごいねライ君！ 振り向くときにそんな動きしてたなんて」

「僕も海未に言われるまでは気付かなかつただけど、どうやら僕にはそういう癖があるみたいなんだ」

もつとも僕は、そんな動きに気付ける海未の観察力に感心していた。

「2人はライの癖について、他に何か気付いたことはないですか？」

そして海未が2人にもそう尋ねた……

2人はそれぞれ考え始めて、やがて穂乃果の方から先に声が入る。

「うーんとね……私が気付いたのは、話し方がなんか昔の人っぽいところとか？」

「あつ！ 私もそれがちよつと気になってたの」

こどりがその話に同調する。

昔の人間か……

「たしかに……ライは、同じくらいの年齢の男性と比べても、どこか落ち着いた雰囲気があると感じます」

「うん。ライ君はなんていうか、他の男の子よりも大人しいっていうか……堅いって言うのかな？」

「っていうより、大人っぽい？」

なるほど……

僕にそういった堅苦しいところがあるから、なかなか他の生徒とも打ち解けづらいのかもしれない。

まあ、女子生徒しかいない音ノ木坂に男1人という、特殊な環境で過ごしているという理由もあるかもしれないが……。もしかしたら今後は少し話し方や態度を変えてみた方が良いでしょうか？

それについて3人に聞いてみた。

「いえ……そこまで気にしなくても良いと思いますよ」

「そうそう！ 海未ちゃんだって、いつも丁寧語だし」

「それに、落ち着いている男の子って格好良くていいんじゃないかな」

「そ、そうなのか……？」

その後も、僕たちは楽しく会話を続けた……

記憶もなく、頼りに出来る友人もない僕に、こうして親身に接してくれる海未たちの存在は、僕にとって救いだった……

この楽しい時間がこれからも続いてほしい……

僕はどこか、そんな風に願っていた。

……

海未と出掛けてから数日経過したある日のこと……

「ライ君！」

「ん？ なんだい、穂乃果」

「あつ、本当だ。右足が動いてる」

「え？」

穂乃果はそう言って僕の足元を見てきた。

「うん！ この前、海未ちゃんが言ってたでしょ？ ライ君が振り向くとき、右足を後ろに引いて、間合いを取ってるって……」

「それで、声をかけてきたというわけか……」

「えへへ……実はそうなんだ。何かステップの参考になるかなあつて思ったからつい……それじゃあ、次の授業始まるから、私いくね。またねライ君！」

「ああ、また……」

そして穂乃果は廊下だというのに走り出していった……
先生から、彼女を注意する声が聞こえる……
またある時は……

「ライ君、ちよつと良いかな?」

「なんだい? ことり」

「ちよつとここの問題教えてほしくて……」

「ああ、ここは……」

先ほどの授業を思い出し、ことりの前で実際に問題を解いてみた。
「ありがとう。おかげで助かちやった♪ それにしても……」
「……」
ことりが不思議そうな顔で僕の足元を見つめる。

「海未ちゃんが言ったとおりだなあって……」

「え? ああ……間合いのことか」

「うん。つい気になっちゃって……ごめんね、まじまじと見ちゃつて」

「いや、気にしてないよ」

「ありがとう。それじゃあまたね♪」

「ああ……また」

またある時は……

「ライ君? ちよつといい?」

「はい。なんでしょうか? 副会長」

「ふーん。なるほどなあ……」

副会長もやはり僕の足元を見てきた……

「えつと……もしかして副会長も?」

「まあ、あれだけ噂になると、うちも気になるなくって」
「……」

いつの間にか噂になっていたようだ。

そして……

「皇くん。ちよつといいかしら?」

「まさか、会長も僕の癖が気になったんですか?」

「え、何のことかしら? 私はただ、この書類の書式について聞きたい

ことがあつただけど……」

「あ、すみません。ちよつと勘違いしてました……それで、この書式ですが……」

こうして、僕の『癖』が気になる生徒から、次々と声を掛けられた。もつとも、ことりや会長は本当に用事があつたみたいだが……

この癖……

今後は控えた方が良いのだろうか……？

STAGE 1 黒の追憶と花の少女

「そうか……みんなは修学旅行に行っていて、学園にはいないんだっただな」

「今からでも追いかける？ 兄さん」

「いや、誰もいない学園の方が今の俺には丁度いい……」

日も沈んだ頃……

誰もいない学園の入り口で、俺と『偽りの弟』は立ち尽くしていた。

俺は、今まで『妹の幸せ』のために行動してきた。

妹の幸せは全てにおいて優先される……

そのためなら、どんなに非情な存在にでもなれた。

使える『駒』は全て使って……

そんな中、俺はある男に出会った。

その男は……記憶を失っているというのに、考え方には揺るぎがない。

それに、自身の現状に対しても取り乱さず、自らを強固に律していた。

その男は、妹とも仲が良かった……

『あいつ』のお蔭で、妹はよく笑うようになった。

妹を笑顔にしたその男に、最初こそは嫉妬した。

だが、それと同時に感謝もしていた。

ある日屋上で、その男は俺と妹の決して知られてはいけない『秘密』を知ってしまった。

俺は『ある力』を使い、その男が聞いた秘密を忘れさせようとした……

だが、それを妹が止めた。

『この方なら大丈夫だ』と……

そしてその男は、自分の記憶が戻りその正体が俺たちに危害を加えるような存在だったのなら、その時は『自分を殺せ』と、何の躊躇いもなく俺にそう言ってきた。

そしてあいつは、俺にこうも言ってきた。

『僕は元々ここにはいてはいけない人間だ。だから消えても問題ない』と……

妹が信用する相手だから……

そして、他人のために自分を蔑ろにするそいつにどこか悲しみを感じたから……

俺もそいつを信じてみたいと思った。

そしてその男の記憶が戻り、俺たちの前からいなくなる時、あいつは長くは生きられないという事情を俺に話した。

俺は考え、そして探した。

あいつが長く生きられる方法を……

不治の病を治す技術を……

俺の『組織』にもそれを探させ、あいつがこの世界で生きられる方法を探した。

そしてその男の存在は、俺たちの『記憶』から消滅した……

「今ここに『あいつ』は……居るはずもないよな？」

「え？」

「いや、何でもない。こつちの話だ……」

「そう、なんだ……？」

『偽りの弟』が不思議そうに首を傾げる。

もしも今、俺の隣に『あいつ』が居てくれたなら……俺は……

なあ……

お前は今、何処にいるんだ？

——『ライ』——

心の中で呟いたその言葉と共に、屋上から花火が上がっていった……

……

僕は現在、アルパカに睨まれている……
何故、こうなったのか……

それは、どういう訳かこの飼育小屋に忘れ物をした生徒がいるらしい。

僕はその忘れ物の回収を頼まれていた。

「……………」

「グウウ……………」

この学院ではアルパカという珍しい生き物を2匹、飼育している。

1匹目のオスのアルパカは毛の色が白くつぶらな瞳が特徴な、人懐っこい性格をしている。

一方メスの方は、茶色い毛皮で目元まで覆われていて、
気性が荒く、よく人を威嚇する。

僕が今、対面しているメスのアルパカは、こちらを威嚇していた
入学した時、この学院の生徒に警戒されることは予測済みだった
が、

アルパカに警戒されることについては……………流石に予想外だった。

「……………!!」

次の瞬間、アルパカがこちらに向かって唾を飛ばしてきた。

僕は咄嗟にそれを躲す。

危なかった……………

もう少し反応が遅れていたら、顔面に唾が直撃するところだった。

僕は一度、アルパカと距離を取る。

さて、どうするか……………

ここは一度撤退し、落ち着いた頃に出直すか？

あるいは、損傷を覚悟してでも突っ込むべきか……………

僕はアルパカの様子を見てみると、後ろから人が近づいてきた。

「あ、あの……………」

その少女は即座に、アルパカの元に寄り、そのアルパカを一瞬にして
落ち着かせていた。

僕はその隙に、飼育小屋に落ちている忘れ物を拾った。

「ありがとう。お陰で助かったよ」

「いえ……私、飼育委員なので」

僕は改めてその飼育委員の顔を見る。

その少女は先日、講堂のライブに来ていたあの少女だった。

「君は、小泉花陽さん？ この前ライブに来ていた……」

「えっと貴方は確か、皇先輩ですよね？」 μ sのお手伝いをして

いた……」

「ああ。と言つても、大したことはしていないけどね」

僕はそう言いつつ、これまで μ sの手伝いをしてきたことを振り返る。

そういえば……

まだチラシ配りくらいしか手伝っていない気がする。

まあ、海末の特訓を手伝う約束もしたのだが、まだ約束だけだ。

あの時、穂乃果たちを手伝うと言っておいてこれだけでは、さすがに問題だろうか？

「あ、あの。 μ sってその後、どうなったんですか？」

僕が今までについて振り返っていると、小泉さんが μ sについて尋ねてきた。

μ sのライブ映像は何者かに撮影され、それがネット上の動画サイトに投稿されていた。

そしてその動画が反響を呼び、今では人気もそこそこ上がってきているようだ。

しかし、新入部員は一向に増えないらしい。

μ sが部として学院に認められるには、部員を最低でも5人は集めないといけないという……

だから、穂乃果たちは今日も勧誘活動に励んでいる。

僕はそのことを小泉さんに伝えた。

「そうなんですか。それでこの前、私を誘ってきたんですね」

「この前？」

「はい。この前、言われたんです……アイドルやりませんか」

て」

小泉さんが言うには他にも『君は光っている』とか『大丈夫！ 悪いようにはしないから!!』などと穂乃果にそう言われたようだ。

まるで悪人か詐欺師のようなセリフである。

「誘われたことは嬉しかったんです………だけど」

「自分に自信が持てない………そういうことかな？」

「はい………」

小泉さんが口にした言葉通り、彼女は自分に自信が持てないようだ。

僕は思わず小泉さんを見つめた。

客観的に見ても小泉さんは可愛いと思うし、素質はあるとおもうのだが………」

僕はそのことを伝えてみた。

「か、可愛い!? わ、私ですか？」

「ああ。僕はそう思う」

「そつ、そんな！ 私なんかでは………」

やはり、そう簡単には自信は持てないか。

もつとも、知り合って間もない僕の言葉が薄く感じるだけかもしれないが………」

僕は一度、話題を変えることにした。

「そう言えば、この前のライブのことだけど………」

僕が先日の講堂ライブの話題を持ち出すと、小泉さんの様子が変わった。

「はい！ 凄かったですよね!!」

「あ、ああ………」

先ほどのおどおどしていた様子とは打って変わり、突然人が変わったように熱く語り始めた。

「私、あの時の先輩方の姿に感動して………」

それからしばらくの間、小泉さんは先日のライブの話について語っていた。

.....

あの後、小泉さんは先日のライブの話だけでなく、アイドルについても熱く語っていた。

小泉さんが語り始めてから、しばらく時間が経過した。

そして気は済んだのか、今は正気に戻っている。

彼女はアイドルのことになると、たちまち人が変わるようだ。

「す、すみません.....私、アイドルのことになると周りが見えなくなっちゃって」

「だが、それだけアイドルに本気だと言うことだろうか？」

「引いちゃったり、してないですか？ 変な子だって思っちゃったり.....」

「全然。むしろ羨ましいと思ったくらいだ」

「羨ましい.....ですか？」

「ああ。僕には記憶が無いから.....そうやって何かに熱中する姿が、僕には羨ましく見えたんだ」

「そう、だったんですか.....」

しまった.....

いつの間にか僕の記憶喪失の話をしてしまった。

少し暗い雰囲気させてしまったようだ。

僕はその雰囲気を変えるため、改めて言葉を発した。

「とにかく、アイドルについて真剣な小泉さんのことを、変な子だなんて思っではないよ」

「あ、ありがとうございます」

「良かったら今度、アイドルについてもっと詳しく聞いても良いかな？」

「は、はい。先輩さえ良ければ.....」

「ありがとう」

そろそろ授業が始まるので、僕と小泉さんはそれぞれの教室に戻った.....

STAGE 12 花の迷い

本日の授業は終了し、やがて下校時間になった。

生徒たちの多くは帰宅し、先ほどまで賑わっていた学院内は人寂しい風景に変わる……

僕はこの風景は嫌いじゃない。

この学院内では良くも悪くも目立つ僕が、人目のない学院内を歩くのは一種の開放感がある。

以前もこんな風にどこかの学校の中でも散歩していたのだろうか……

まるで、それが当たり前であるかのような足取りで僕は学院内を歩いていた。

中庭にたどり着くとベンチに1人で座り、なにやら悩んでいる様子の小泉さんを見かけた。考え事でもしているのだろうか？

近づいてみると、彼女のその様子はどこか落ち込んでいるようにも見えた。

「小泉さん」

声をかけると、小泉さんは俯いていた顔を上げ僕がいる方向を向いた。

少しだけ驚いたような表情をしていたが、やがて落ち着きを取り戻したようだ。

「皇先輩……？ どうかしたんですか？」

「いや、ちょっと散歩してたら見かけたので声を掛けたんだが……邪魔をしてしまったかな？」

「い、いえ！ とんでもないです！」

「それなら良かった。それにしても何かあったのか？ なんだか悩んでいるみたいだけど」

「えっと、その……」

僕がそう聞くと彼女はまた、落ち込むような表情を見せた。

聞いてはいけない内容だったのだろうか……

「詮索してすまなかった。言いたくないことなら別に……」

僕がそう言いかけた時、小泉さんが慌てて答え始めた。

「ち、違うんです！ えっと、その……」

彼女が何かを言いかけたので、僕はその言葉の続きを待つ。

「聞いてくれますか？ 私の話……」

「ああ。僕で良ければ」

こうして彼女は自身の悩みを打ち明けてくれた……

◇

小泉さんは迷っていた……

彼女は昔からアイドルが好きで、それは幼い頃から振り付けを完璧に覚えるくらいだった。

僕が先日、小泉さんと話をした時……

最初こそはぎこちなく会話をするだけであったが、アイドルの話題になると、まるで人が変わったように熱く語っていた。

その溢れる情報量や情熱から、彼女のアイドルにかけるものは本物なのだろう。

そんな小泉さんはある時μ'sの初ライブを見てそして憧れた。

μ'sのメンバーの1人の穂乃果もまた、彼女を勧誘した。

しかし彼女は自分に自信が持てず、その申し出を保留にしていた……

そんなある日、彼女は幼馴染の星空さんと、とある一件で知り合った西木野さんの2人からもアイドルをやるべきだと勧められたそう
だ。

そして現在、そのことについて悩み続けているということだった。

「私、ダメですよね……みんなに励ましてもらっているのにずっと迷ってばかりで……」

小泉さんが悲痛な表情を浮かべ、そう言った。

「そんなことはないと思うよ。誰にだって不安や迷いなんてものはあるだろう？」

「それって、先輩もですか？」

「そうだな。今の僕の不安と言えば、やはり記憶のことかな」

「記憶喪失、ですよ？ この間言っていた……」

小泉さんには先日、飼育小屋で話をしている時に記憶喪失のことは話した。

その時のことを思い出すかのように彼女は考え始める。

そして考えが纏まったのか、彼女は話し始める。

「もしも私が記憶を失くしちゃったら、たぶん今以上に自信が無くなってたかもしれないです……先輩は大丈夫なんですか？」

「そうだな……記憶が無いのは確かに辛かった。けど今はそれほどでもないかな」

「そう、なんですか？」

小泉さんが不思議そうに首を傾げる。

僕は彼女が感じている疑問に答えた。

「僕は自分がひとりぼっちだと思っていたんだ。だけどそんな僕を助けてくれた人たちがいた」

「それってμ、sの先輩方ですか？」

「ああ」

もつとも、僕がこの学院に来てからお世話になった人たちは、μ、sの3人だけではないのだが……

穂乃果に巻き込まれる形でμ、sの手伝いをしたことがあった。

まあ、僕が不用意に発した言葉が原因ではあるのだが……

本来なら僕は、自分の失くした記憶のことを優先するべきなのだ。

だが、それでも彼女たちの手伝いを優先してしまうのは、きつと穂乃果たちに何か人を惹きつけるものがあるから。

記憶が無くて不安だった僕は、彼女たちと接することで知らず知らず救われたのかもしれない。

小泉さんも、もしかしたら穂乃果たちと接することで自分を変える切っ掛けになるのかもしれない。

それだけ考えると、僕は小泉さんにある提案を試してみた。

「小泉さん」

「はい。何でしょうか？」

「スクールアイドルを本気でやってみないか？」

「でも……私には向いてないですから」

「そうかな？ 小泉さんの場合は素質は十分だと思う。可愛いし、アイドルの知識も豊富だ。後は自分に自信をもつことさえ出来れば……」

「そう、ですか？」

「その自信が持てるまで僕も何か手伝うから、一度やってみないか？」
「えっ？」

「と言つても、アイドル知識の乏しい僕に手伝えることなんてあまり無いのかもしれないけど」

「ど、どうして先輩は、そこまで言ってくれるんですか？」

「そうだな……」

彼女にそう言われ、改めて考え始める。

穂乃果たち μ sに協力したいという気持ちもある。彼女たちからは、もしいい人が見つかったら勧誘してほしいと頼まれたこともあった。

アイドルについての情報に熟知している小泉さんが μ sに加われば、きつと心強い存在になるだろう。

それに小泉さんの落ち込んでいる姿はあまり見たくはなかった。何故、そう思うのかは分からなかった。

すると、眠っている記憶の中から、とある少女のイメージが僅かに浮かぶ……

そのイメージは所々霞んでいてハッキリとは見えなかったが、こちらに向かって微笑んでいるようにも見えた。

僕はその少女を見ていると、何かを悔いるような気持ちになっていた。

もしかしたら小泉さんに、その少女の面影を重ねているのかもしれない。

相変わらず、その少女が何者かは分からないのだが……

「先輩？」

しばらくそのまま、立ち尽くしていたからだろう。

小泉さんが心配そうに声をかけてくる。

「すまない。少し考え事を……それで理由なんだけど、見てみたいんだ」

「えっ?」

「君がアイドルとして輝く姿……君の笑顔を」

僕がそう言うのと彼女は動揺した様子で何かを伝えようとした。

「え、えっと……せ、先輩。その……」

「ん? どうした?」

「そ、そう言う風に言ってくれるのは嬉しいんですけど……その……」
どうしたんだろう? 僕が言ったことに何か気になったことでもあるのだろうか?

しばらく沈黙が続くと、後ろから誰かが近づいて来た。

「お取り込み中悪いんだけど……」

近づいてきた人物は西木野さんだった。

「一体どういう状況なんですか?」

「それは……」

僕たちは今の状況を西木野さんに説明した……



「そういうことなんですね。それにしても……」

あれから西木野さんに事情を説明した。

彼女は納得してくれたようだが、何か言いたいことがあるようだ。

「貴方、よくそんな恥ずかしい台詞言えるわね……」

「僕の言葉、どこがおかしかったかな?」

西木野さんが何やら呆れている表情で僕を見てそう言った。

僕はただ、思ったことを口にしただけなのだが……

「先輩は、只でさえ目立つんだから、もう少し発言には気をつけた方がいいわよ?」

「分かった。いや、正確にはよくわからないが……とにかく気をつけるよ」

僕は、他人が聞いたら恥ずかしいような台詞を知らず知らずに言っているようだ。

いまいち納得はいかなかったが、西木野さんの言葉にも一理ある。僕が何か不用意な発言をして、自身の評判を悪くするわけにもいかない。

一応気をつけてはみるが、なにがおかしいのかは……やはりよく分からなかった。

今度、誰かに相談してみるか……

「だけど先輩の言うことにも一理あるわね。小泉さん。貴女、声は良いんだから後は大きな声を出す練習をすれば良いだけでしょ？」

「でも……」

「きつとそれを続けていけば、自身を持つことにも繋がるはずよ」

「西木野さん……」

西木野さんの励ましに、小泉さんが感嘆する。

彼女もまた、小泉さんのことが気になるようだ。

「試しに今から練習でもしてみない？ 声の練習……私も一緒にやるから」

「うん……やってみる」

そうして2人は発声練習を始めた。

すると、西木野さんが僕の方を見た。

「ほら、皇先輩も」

「僕もやるのかい？」

「こういうのは、人数が多い方が良いんです」

そういうものなのか……

まあ、先ほど小泉さんに手伝うと言ったばかりなのだから、ここは一緒にやってみるべきか。

人数が多い方が良いと言うことなので、僕は先ほどから木の影に隠れて『こちらを見ていた』1人の少女にも声をかけてみた。

「折角だから、『その君』も一緒にやってみないか？」

「にゃ!?!」

小泉さん、西木野さんの2人ではない別の少女から声上がる。

そして、その少女は木陰から姿を表す。

「凜ちゃん？」

小泉さんが不思議そうに星空さんを見る。

「な、なんで分かったにや？」

「いや、気配がしたから……」

「なにそれ、意味わかんない」

僕がそう答えると呆れたのか、西木野さんが少し不満そうにそう答えた。

◇

それから新たに星空さんも加えて4人で発声練習をすることになった。

西木野さんの歌声は音楽室でも聴いたことのある透き通った美しい声。

次に、元気が伝わる星空さんの無邪気な声。

そして舌足らずではあるが、一生懸命で綺麗な声の小泉さん。

それぞれが、特徴的な声をしていた。

しばらくして僕たちは発声練習を終えた。

「かよちん凄いにや！」

「そうね。ここまでやれるなら大丈夫だと思うわ」

2人が小泉さんをそう評価した。

後はこの練習を続けていけば、彼女がスクールアイドルとして活躍出来ることは間違いないだろう。

「それじゃあ早速、μ sのところに行くにや」

星空さんは今すぐ穂乃果たちのところへ向かうべきだと判断した。

「待って、まだ早いわ。ちゃんと準備してからじゃないと」

一方、西木野さんはもう少し練習をしてからμ sに入るべきだと考えている。

「かよちんはいつも迷っているばっかりだから、パツと決めてあげた方がいいの！」

「そうかしら？　この前話した感じだと、そうは思わなかったけど？」
西木野さんの意見の通り、ここは一度準備をするべきだろう。
しかし、星空さんの発言にも一理あると思う。

押しの弱い小泉さんには、多少の勢いはあつたほうが良いかもしれない。
ない。

やがて、小泉さんを励ましていた2人は途端に言い争いを始めた。
僕は仲裁に入ろうとしたが……

「2人とも、喧嘩はそのくらいに……」

「貴方からもなんとか言つて！」

「今から先輩達のところに行くべき！　つて、先輩もそう思いますよね!？」

「お、おい……」

2人の口論に巻き込まれてしまった……

「あ、あの……!!」

やがてそんな様子を見かねたのか、小泉さんが声を上げた。

「わ、私……行きます」

小泉さんは先ほどのおどおどしている様子とは打って変わり、そして決意したようにその言葉を口にした。

STAGE 13 花の決意

「みんな……少しいいかな？」

あの後、僕はμsが練習場として使っている屋上に訪れた。

ちなみに、小泉さんたちには屋上の入り口付近で待機してもらっている。

「ライ君？ 今日はどうしたの？」

3人は休憩の途中だった。穂乃果が不思議そうに尋ねる。

「実は……入部希望者を連れてきた」

「本当!？」

「どなたでしようか？」

「今から紹介するよ。きつと気に入ると思う」

僕が合図をすると屋上の扉から、3人が出てきた。



「花陽ちゃん！ 来てくれたんだね!!」

「は、はい……」

小泉さんは穂乃果の勢いに少し押されていた。

「え、えっと……その……」

すると小泉さんの隣に並び立つ形で西木野さん、星空さんの2人がそれぞれ彼女を励ます。

「さつきも言ったでしょ？ 声を出すなんて簡単だって。大丈夫よ。貴女なら出来るわ」

「そうだよ！ それに凜は知ってるよ。かよちゃんが今までずっと、アイドルになりたいって思ってたこと！」

「西木野さん……凜ちゃん……」

僕も2人に続いて彼女に言葉を送った。

「今の気持ちを正直に話してみて。きつとその気持ちは伝わるから……」

「先輩……」

僕たちに言えることはこれで終わり……後は彼女次第だ。

その場にいる全員が彼女の言葉を待つ……

やがて小泉さんは自身の想いを言葉にした。

「私、小泉花陽と言います！ 1年生で、声も小さくて、声も小さくて、人見知りで得意なものは何も無いです……」

「かよちゃん……」

星空さんが心配そうに様子を伺おうとするが、その直後に小泉さんが声を発した。

「でもっ！ アイドルへの想いは誰にも負けないつもりです！ だから……私をμ'sのメンバーにしてください!!」

小泉さんは少し涙ぐみながら、一生懸命に言葉を発して懇願した。

その場はしばらく沈黙した……

やがて、穂乃果が彼女に手を差し伸べ……

「こちらこそ……よろしく!!」

穂乃果たちは満面の笑みで小泉さんを歓迎した。

みんなが小泉さんの入部を喜んでいて。

僕はその光景を見て何かを感じていた。

僕は、この感覚を知っている……



「それで2人はどうするの？」

「え？」

小泉さんの入部が承諾された後ことりがそう聞くと、星空さん、西木野さんの2人は不意を付かれ、少し驚いていた。

「まだまだ、メンバーは募集中ですよー」

海未、ことりはそう言つて2人に手を伸ばし歓迎の合図を向ける。

2人は少し戸惑っていた様子だったが、やがてその手を取るようにならずに踏み出した。

……こうして、μ'sのメンバーは6人になった。

◇

小泉さんがμ sに加入した後の帰り道、
もうすぐ日は沈み外は危険なので、僕は小泉さんを彼女の自宅まで
送っていた。

その道中、小泉さんが一言呟いた。

「皇先輩ってお兄ちゃんに似ている気がします」
「え？」

彼女に兄がいることは初耳だったが、それ以上にその兄に似ている
と言われたことに僕は驚いた。

「どういうところが似ているのかな？」

「私のお兄ちゃんって無愛想で無口なところがありますけど、それで
も人を気遣ったりする優しいところがあるんです」
なるほど……

無愛想で無口な所は認める。この学院に来てからも穂乃果たちに
散々言われてきたことだから。

だが……

「あつ！えつと、先輩が無愛想で無口だって言う訳じゃないですよ
……！」

「いや、それは良いんだけど……」

「えつとつまり……私が言いたいのは、先輩は優しい人だなあってこ
とで、その……」

小泉さんと、そのお兄さんのような優しさが果たして本当に僕にあ
るのかどうか、ふと考えてみた。

しかし、何故かそうは思えなかった。

どうしてそう思うのだろう……

理由として考えられることは、おそらく先ほど浮かんだあのイメー
ジ。

小泉さんよりも幼い見た目の、肩まで髪をおろした少女の姿……

その少女を見ていると、愛おしいと感じると共に酷い罪悪感、そし
て僕自身に対しての憎しみにも近い感情が湧き上がる。

僕はきつと、その少女に何か……酷いことを……

「皇先輩……大丈夫、ですか？」

よほど酷い顔をしていたのか、小泉さんは僕に対して気遣うような視線を向けて声をかけてくる。

「小泉さん、僕は……」

こんなことを彼女に伝えても仕方がないのかもしれない。だが……

こんな僕を優しいと言ってくれた小泉さんの言葉を否定するのは心苦しいが、ここは正直に話してみよう。

「花陽って呼んでもらえませんか？」

「えっ？」

しかし、僕が話を続ける前に彼女は咄嗟にその言葉を口にした。

「先輩ってお兄ちゃんに似ているので、苗字だとなんだか落ち着かなくて……ご迷惑、ですか？」

「いや！ そんなことは……その、それなら僕のことともライでいい」

「は、はい！ ライ、先輩……」

小泉さんが僕に、お兄さんの面影を重ねているように、もしかしたら僕も彼女のことを『妹』のように見ていたのかもしれない。

だからこそ僕は彼女を放っておくことができなかつたのだろう。

そして先ほど記憶の中に浮かんだ少女に対する、兄妹に向けるような親愛の感情……

その子の正体は、おそらく……

「えつと、花陽……さつき僕のことを『優しい』って言ってくれたことはすごく嬉しい。だけど、僕自身はそうは思えなかつたんだ」

「どうして、ですか……？」

「これは先ほど思い出したことなんだが、もしかしたら僕には『妹』がいたかもしれないんだ」

「ほ、本当ですか？」

「ああ。だけど僕はその『妹』のことを思うと、言い知れぬ罪悪感を感じて、自分自身を許せないような……そんな気持ちになつてしまつたんだ」

僕の言葉を小泉さんは静かに聞いていた。

「その……つまり、僕はきつと……」

『優しい人間では無い』……そう言おうとした。

しかし、僕がそう話す前に花陽がそれを遮った。

「そんなことないです……!」

「花陽……?」

花陽が突然普段より大きめな声を出したので、僕は少し驚いた。

「ライ先輩は優しいです……飼育小屋で話をした時の事、覚えてますか?」

あの時は確か、アルパカの対応に困っていたところを花陽に助けられて……

そして彼女のアイドル好きを知ったきっかけにもなった。

「ああ。覚えている」

「私、あの時つい暴走しちゃって……アイドルについて数十分くらい語り続けて……だけど先輩は、そんな私の話を真剣に聞いてくれて、また聞きたいって言われた時はすごく嬉しかったです」

「……」

「今日だって凜ちゃん和西木野さんと一緒に私を励ましてくれて……そんな先輩が優しくないわけじゃないです」

花陽は一生懸命に言葉を紡ぎ、僕にそう伝えてくる。

「だから先輩も、自分に『自信』を持ってください」

先程、僕たちが花陽に対して放った言葉を今度は僕に向けてきた。

彼女に対し『自信を持つてほしい』などと言った僕にそれが出来ないのは、格好がつかないだろう。

「分かった。花陽がそこまでいうなら、僕は信じるよ」

もつとも、僕自身を信用するのではない。

こんな僕に対してそう言ってくれた、花陽を信じるんだ。きつとそれが、いつか自分の自信に繋がるはずだ。

「良かったです。では約束しませんか?」

花陽はそう言って小指を僕に向けてきた……

何かの合図だろうか?

「ライ先輩って『ゆびきり』は知ってますか？」

「ああ」

ゆびきり……確か日本の、約束の合図の1つだったか？

僕はそれをどこで知ったのだろうか……？

自然な動作で彼女の小指を自分のと絡め、そしてそれをまじないの言葉と共に上下に振る。

「……怖いな。約束を破ったら針を千本飲まなくてはいけないのか」

僕は少し苦笑しつつ答えた。

その僕の様子を見て花陽も微笑んだ。

「ふふっ、そうですよ。だから……約束ですよ？　ライ先輩」

「分かったよ……花陽」

僕にいたはずの『妹』に対する罪悪感などは気になったが、今はこんな僕を信じてくれている花陽を信じることにしよう。

その後、花陽を自宅まで送ってから、少し寄り道しつつ帰宅した……

◇

ライ先輩に家まで送ってもらった後の夜……

疲れて眠っていた私は、なんだか妙な夢を見ていた。

その夢では、綺麗なお部屋の中心で、車椅子に乗っていて両目を閉じている女の子が1人で折り紙を折っていた。

しばらくして、そのお部屋に1人の男の人が入ってきた。

その人はライ先輩に似ていた……

というより、先輩と瓜二つだった。

綺麗な銀色の髪、そして先輩の着ている制服も全く同じものだった。

「一生懸命折って見たんです。きちんと折れていますか？」

女の子が作り終わった折り紙を大事そうに胸元に抱えていた。

そして先輩は、その姿をどこか寂しそうな表情で見つめていた。

「あの……何かあったんですか？　いつもと雰囲気違いますけれ

ど、何か心配ごとですか？」

女の子は当たり前のように、先輩の気持ちに気付いて声をかけた。その言葉を聞いて、先輩はとても悲しそうな顔をする。

どうして、そんなに悲しそうなんだろう……？

「正夢、だったのでしょうか……とても大切な人が急にいなくなってしまう……そんな夢を見たのです」

「……!?!」

先輩は声には出さなかったけど、女の子の言葉にすごく驚いていた。

「夢……ですよね？」

「……」

女の子がとても悲しそうにそう呟いた。

先輩はその子の言葉に、何も答えられないでいた。

その子の白く小さな指は、何かを求めるように宙をさまよっている……

先輩はその子の手を自分の手で優しく握った。

その子はその温もりを感じると、安心してその手をぎゅっと握り返す。

だけど、先輩の表情はどこか曇っていて……

「記憶が戻った。だから僕は、ここを出ていかないといけない」

その言葉を聞いた瞬間、女の子の表情が曇った。

「戻ってきて……くれますよね？」

女の子の小さな手がまた震えだしたけど、先輩はその手を優しく包み込んで精一杯の笑顔で答えた。

「ああ、もちろんだ」

「よかった……」

その瞬間、女の子は手の震えを止めて嬉しそうに微笑んだ。

「精一杯、折り紙を練習しておきます。戻ってきた時、びっくりしてもらうの」

「ああ。期待しているよ」

それから先輩とその子は、一緒に折り紙を始めた。

2人はとても楽しそうだった。

だけど、先輩の方を見てみると、とても悲しそうに、だけどそれを目の前の女の子に気づかれないうように、さっきの帰り道の時と同じくらい優しそうな表情で接していた。

2人が一緒に過ごせる日は、たぶんこの日が最後なんだろう……

先輩の姿を見ていると、そう思えてしまうのが辛かった。

ライ先輩は記憶喪失だって聞いたけど、この夢での先輩は記憶を取り戻しているみたいだった。

この夢の先輩は自分が求めていた記憶を取り戻しているはずなのに、そんな先輩の姿はとても寂しそうで、そして悲しそうに見えた。

ライ先輩は今音ノ木坂にいて、記憶を失くしちやってるけど……

それって何か事故にあつて、また記憶を失くしちやったのかな……

？

そして、もしも記憶が全部戻ったら前に通っていた学校に帰っちゃうのかな？

もしもそうだったら、ちよつと……寂しいな……

翌日、私は目が覚めると、その記憶の内容を忘れていた。

STAGE 14 アイドル レッスン

休日……

僕は街を散歩していると、とあるスクールアイドル専門店に注目した。

僕はあの3人のライブを観て、そして花陽のスクールアイドルに対する情熱を知ってから、少しずつスクールアイドルという存在が気になっっていた。

彼女達の輝きに満ちた表情を見ると、不思議と暖かい気持ちになれたのだ。

もしかしたら、僕は彼女達が羨ましいのかもしれない。

記憶が無い空っぽの僕と違い、彼女達には目標がある。そして、その為に全力で今を生きている。

僕は、その姿にどこか惹かれているのかもしれない。

僕はとあるグッズを手取る……

それはA|R|I|S|Eのグッズだった。

A|R|I|S|Eとは、UTX学園所属のスクールアイドルの頂点とも言える存在だ。

そういえば、穂乃果と初めて出会った時、彼女達のライブを観ていた……

……
A|R|I|S|Eのライブの無駄のない動き、そして自信に満ちた表情

彼女達にもまた、なにか目標がありその為に全力で突き進むからこそ、大勢の人々の支持を得られるのだろう。

僕はそのグッズを見つめながら、しばらく考え事をしていた。すると後ろから何者かの気配を感じた。

落ち着いて様子を窺うと、少し小柄の少女がこちらを見ていた。

「あの……なにか御用でしょうか？」

僕は後ろにいる少女に声をかけた……

すると、そこにいたのは以前、UTX高校付近で見かけた怪しい格好をした少女だった。

そして先日の講堂のライブを見ていた少女の1人でもあった。

僕は彼女の言葉を待っていると、彼女の視線は僕の手元にあるグッズに注目している。

もしかして、このグッズが欲しいのだろうか？

「あの……もし良ければ、このグッズはお譲りしますよ」

「えっ!? い、良いの?」

「あつ、はい……」

僕はそのグッズをその少女に引き渡した。

「あ、ありがとう……」

彼女は動揺しつつ、そのグッズを受け取りレジへ向かった。

僕はそれを確認すると、その店を後にした。

◇

僕が店を出て帰ろうとすると、先ほどの少女に呼び止められた……そして現在、その少女と近くのファーストフード店まで移動していた。

彼女が言うには、僕が先ほど彼女に譲ったグッズはスクールルアイドルファンには相当なレアグッズらしく、それを譲った僕に何かお礼をしたい……ということだった。

「さっきはありがとう。このグッズ、前から凄く欲しかったのよ」

「そこまで珍しい物なんですか?」

「アンタ知らないの? このA—RISEのグッズはね……」

それから彼女の話は数十分に渡り、続いた……

◇

「まあ、こんなところかしら? って、アンタ! ちゃんと聞いてたんでしょ?」

「はっ」

あれから彼女は、A—RISEのグッズの話の後、続けて曲や踊り

についても話していた。

彼女のアイドル知識は、花陽と同じくらい、もしくはそれ以上だと僕は感じた。

「そう言えば、まだ自己紹介してなかったわね。私は矢澤にこ……音ノ木坂の3年よ」

「よろしく願います。僕は……」

矢澤先輩に続き、僕も自己紹介しようとしたが……

「知ってるわよ。最近うちに転入してきた、2年の皇ライでしょ？」

「既にご存知でしたか……」

どうやら先輩は僕を知っているようだ。

「まあね。アンタ結構、噂になってるし……」

噂か……

まあ、女子高に男子1人などという特殊な状況なら、注目されるのは仕方がない。

それなら、先輩が僕を知っていても不思議はないだろう。

噂とやらが気にはなつたが、少し怖いので聞かないことにした……

それにしても……

先ほども思ったが、矢澤先輩のアイドル知識の豊富さは思わず感心するくらい見事なものだった。

A—R—I—S—Eはもちろん、他の人気ユニットのことにも詳しい。

その知識の多さは花陽と同等、もしくはそれ以上かもしれない。

「そういうえば、お礼がまだだったわね。何が良い？ あんまり高いのはダメよ？」

「えーつと……」

お礼など、特に考えていなかったのどうしようか考える。

ここに移動する前にお礼などいらないことは既に伝えたのだが、彼女に『それでは気がすまない』と言われた。

別に欲しいものなど特に無い。

まあ、強いて言えば失った記憶くらいだが……こればかりは、彼女がどうにかできる問題ではないだろう。

さて、どうするか……

先輩は先ほど僕に語ったように、アイドル関連の知識が豊富だ。そして僕は何故かスクールアイドルという存在が気になっている……

「どうしたのよ？ いきなり黙りこんで……」

「矢澤先輩……もし迷惑でなければ今度、スクールアイドルについて教えていただけませんか？」

「な、なによ？ 急に……」

「スクールアイドルについて、少しだけ気になったので……」

「アンタもしかして、スクールアイドルになりたいの？」

「いえ、そういう訳ではないんですが……」

先輩は少し考え込み、そして……

「アンタ……明日、時間ある？」

彼女は僕にそう尋ねてきた。

「はい」

「分かったわ……お礼のこともあるし、特別に教えてあげる！」

「明日からアンタに、スクールアイドルとは何かを、きっちり叩き込んであげる！ 覚悟しなさい!!」

彼女は立ちあがり、僕に人差し指を突き付けそう言った。

お礼と言う割には少し高飛車な態度ではあったが、僕はそんな彼女の態度に、不思議と嫌な感じはしなかった。

「それじゃあ明日、アイドル研究部の部室まで来なさい！」

「はい」

物をねだるのは流石に気が引けるし、丁度、スクールアイドルに対して少しでも興味があったので、アイドル知識が豊富な先輩の話聞くことは、僕にとっても何かプラスになることがあるのかもしれない。

取り敢えず明日は、忘れずに『アイドル研究部』の部室まで行ってみよう。

その後、先輩と長時間話をして疲れたこともあり、夕食の材料を買い忘れてしまった……

そして帰宅途中に見かけた店で、『ピザ』を買ってから帰宅した。

ピザを食べるのは今日が初めてのはずだが、これ食べていると不

思議と懐かしい感じがする……

◇

翌日、僕は『アイドル研究部』の部室前まで来ていた。

部室の電気は点いているようなので、おそらく先輩はこの中にいるのだろう。

ノックをすると……

「よく来たわね！ ライ!!」

先輩はそう言って、僕を部室の中に招き入れた。

僕は周囲を見渡してみると、その部室はアイドル関連と思しきグッズで溢れていた。

「本日はよろしくお願いします」

僕は内心でその数に圧倒されつつも、落ち着いて挨拶をする。

「よろしく……取り敢えずアンタは今から、私の弟子になりなさい！」

「えっ……っ？」

先輩はいきなりそんなことを言い出す。

一体、いつからそんな話になったのだろうか？

僕はただ、先輩からアイドル関係の話を少し聞ければ良かっただけなのだが……

「これから私のことは、師匠と呼びなさい！」

僕が先輩の言葉に困惑していると、彼女は勝手に話を進める。

さて、どうするか……

「これは命令よ！ 良いわね!!」

仕方ない……

頼んだのは僕だし、取り敢えずここは先輩の……師匠の『命令』に従っておこう。

「イエス、マイ・ロード」

「何よ、それ？」

「『了解』という意味です」

「ふーん。まあ良いわ」

師匠は、先ほど僕が発した言葉の意味が分からないようだったが、適当に流していた。

それにしても、僕はどうしてあんな言葉を……？

「命令」という言葉を聞いた瞬間、そう答えた方が良いと思ったから口にした。

これも失くした記憶の……？

相変わらず、僕の記憶は謎に満ちている。

◇

それから……

彼女の『アイドル講座』が始まった。

「早速だけど、聞いわよ？ 『アイドル』っていうのは何だと思う？」
質問の意図としてはおそらく、『アイドルとはどんな仕事か』と聞いているのだろう。

僕は思いついたことをそのまま答えた。

「お客さんに笑顔を見せる仕事……でしょうか？」

「違うわ！ 間違っているわよ。ライー！」

どうやら違うようだ……

師匠は腕を組み、やや強めの口調でそう答えた。

それにしても、何処かで聞いたことのあるような台詞だな……

それはそれとして、僕は彼女の答えを待った。

「アイドルっていうのは笑顔を見せる仕事じゃないの。『笑顔にさせる』仕事なのよ！ それだけはよく覚えておきなさい!!」

「イエス、マイ・ロード」

「よーし！ それじゃあ次は……」

師匠はそれから、僕にアイドルについての心得や理想についても熱心に語ってくれた。

◇

「今日はこんなものかしらね」
約数時間に渡り師匠のアイドル講座は終了した。
彼女のアイドルに対する想いは花陽と同じくらい強いものだった。
彼女はスクールアイドルに対して高い理想を持っている。
僕は最初こそ、彼女は単なるアイドルのファンなのだと思っていた
が、ただのファンでは片付かない程の知識、そして高い理想……
もしかすると、彼女もスクールアイドルを経験しているのかもしれない。

「また明日も来なさい！」
今日だけ、少し話が聞ければそれで良かったのだが、師匠は明日も
続けるつもりのようなのだ。

この学院に来てから今まで、僕に対しこんな風に強気な態度で接する人は初めてだった。その彼女もまた、僕を歓迎してくれる。
僕はその事が嬉しかった。

「それじゃあ今日は、この言葉で締めるわよ……にっこにっこにー！」
すると突然、師匠はその言葉と共に何かのポーズを取り始めた。
「……」

僕は咄嗟の出来事に反応が出来なかった……
「何黙ってるのよ？」 ほら、アンタもやりなさい！」
すると、先輩がやや不満そうな顔をして僕を見る。
仕方がない……やってみよう。

台詞は、確か……

「にっこにっこにー……」
僕は先ほど師匠の台詞を口にした。
少し、恥ずかしい……
しかし先輩はまだ、不満そうに僕を見る。

「声が小さい！ もっと大きな声で!! にっこにっこにー!!」
「に、にっこにっこにー……」

誰も見てはいないが、やはり恥ずかしい……

その後、僕に動作に何か不満があるのか、何度もこの台詞やポーズ
を繰り返し練習する羽目になった……

この後は生徒会の手伝いがあつたのだが……
僕は結局、遅刻した。

◇

あの後……

師匠の掛け声に付き合わされた後、生徒会室を訪れた。

「遅かったねライ君」

副会長は僕を、何故か微笑みながら見ている……

何かあつたのだろうか？

「すみません。途中で師匠……先輩との用事が長引いてしまつて

……」

「結構楽しそうやったやん」 ポーズまでは見れんかったけど」

「……!？」

僕はその言葉に動揺した。

まさか聞かれていたとは……

「せやけど、声はバツチリ録音しといたよ」

「け、消してください。今すぐに……!」

僕はそう訴えたが、副会長はそのデータを消すつもりは無いようだ

……

「ふふっ、ライ君もなかなか良い顔するようになったやん」

「えっ……?」

「最初の能面みたいな表情からすごく変わったと思うんよ」

「そう、ですか……?」

本当にそうなのか？

自覚が無いが、副会長がそう言うのなら間違いはないのだろう。

もしそうだとしたら、それは……

μsのみんなや生徒会の2人と師匠……

そして、この学院で僕に対し、気さくに接してくれた生徒達のお陰
なのだろう。

◇

生徒会の仕事を手伝っている途中、僕はふと気になったことを、副会長に聞いてみた。

「副会長……」

「ん……どうしたん？」

「矢澤先輩は、アイドル研究部は何故、先輩1人に……？」

この学院の部活動は部員が5名以上揃わないと部活申請出来ないはずだ。

しかし……アイドル研究部は依然として健在している。

師匠には先ほど、他の部員について聞いてみたが、部員は師匠1人しかないそうさ。

もしかして何かのトラブルがあつて、他の部員は辞めてしまったのだろうか？

「うーん……ウチから話しても良いんやけど、にこっちに直接聞いてみた方が良いんやない？ あの子、ライ君のこと気に入ってるみたいやから」

「えっ、そうなんですか？」

「多分そうなんやない？ もし気に入ってなかったら、にこっちが、わざわざ部室に入れたりしないと思うんよ」

「なるほど……」

もう少し師匠に関わってみることで、何か事情が分かるのかもしれない。

とはいえ、それを知ったところで僕に何か出来るという訳でもないかもしれないが……

その後……

生徒会の仕事を手伝いが終わった後、僕は自宅で師匠から教わったことを復習することにした。

その間は、不思議と記憶のことは気にならなくなっていた。

STAGE 15 アイドル ギブアップ

矢澤にこ……

彼女のアイドルに対する情熱は、この間、μ×sに参加した花陽と同じくらいのものだった。

そんな先輩はアイドル研究部の唯一の部員にして部長。

しかし、彼女以外に部員が存在しない理由については、まだ分からない。

東條副会長は事情を知っているようだが、それを話すことはしなかった。

『知りたければ直接聞け』という事らしいが……

しかし他人の事情に、ただの好奇心で首を突っ込むべきではないだろう。

それはそうと……

僕は現在、矢澤先輩を『師匠』と呼びスクールアイドルについて教えを請う立場になってしまった。

僕はただ、スクールアイドルについて少しだけ話を聞ければ良かったのだが……

しかし、師匠は少し話すだけでは満足はしなかったらしく、師匠と遭遇する度に『アイドル研究部』の部室まで連れ込まれてしまう。

なんだかここ最近、ずっと振り回されている気がする……

だが、不思議と悪くはない……むしろ良い方だ。

記憶を探している時よりも、充実した毎日を送れているのかもしれない。

それは、穂乃果たちを手伝っていた時にも薄々と感じていた。

中々戻る気配のない記憶を求め、無駄に時を過ごすくらいなら……

いつそのこと記憶のことなど忘れ、この学院で毎日を楽しく過ごす方が良いのかもしれない……

そんな風に感じてしまうということは、もしかすると……僕は、記憶を思い出したいくないのかもしれない。

それでも、僕は……

◇

さて……

今日も師匠の「アイドル講座」があるのだが、まだ時間がある。

僕は、時間潰しも兼ねて中庭を適当に散歩しようとした。すると、矢澤先輩……師匠が中庭を慌てて走っていた。

「師匠、どうかしましたか？」

師匠の、その異常に慌てている姿が気になり、僕は思わず声をかけた。

師匠は僕の姿を確認すると、こちらに向かって来た。

「ら、ライ……ちょうどいい所に来たわね……今から私を助けなさい！」

助ける？ 一体何から……

周囲を見渡しても、特に怪しい人物はいないのだが……

「お、追われてるのよ……だから助けなさい！」

一体誰に追われているというのだろうか？

再度周囲を見渡すが、やはり不審者は見当たらない。

しかし、師匠の慌てている様子から嘘を言っている訳では無いようだ。

「何ぼーつとしてるのよー！ いいから助けなさいよー！」

いまいち納得はいかないが、一度師匠を落ち着かせるためにも、ここは言う通りにしてみよう。

「分かりました……では、行きますよ」

僕は師匠を抱えて走り出そうとした。

すると、師匠が何故か不満そうな声を上げた。

「つて、アンタいきなりなにしてるのよ!？」

「追われているのでしよう? 事情は分かりませんが、取り敢えず逃げますから……しっかり掴まっていてください。それじゃあ、行きま
すよ……!」

「ちよつと待ちなさ……わっ、きゃああ!!」

僕はそのまま一気に駆け出した。

◇

「見つけたにや……つて、ライ先輩!」

師匠を連れて走っている最中、星空さんとすれ違った。

彼女が師匠を追いかけていたのだろうか?

……よく分からないが、取り敢えず逃げ切り様子を見よう。

「あっ! 見つけた〜!」

「ら、ライ君!？」

「ど、どうして先輩を抱えて走っているのです?」

「さあ……? と、とにかく! ライ君たちを追いかけてよう!!」

今度は穂乃果、ことり、海未の3人とすれ違った。

おそらく彼女たちも師匠を追いかけていたのだろう。

何かの遊びなのだろうか? ますます訳が分からない……

僕は近くの壁を足場にして、そのまま一気に駆け出した。

「ライ! あ、アンタ……何当然のように壁を走ってるのよー!」

「しっかり掴まっていてください。もう少して振り切れます」

「ちよ、ちよつと待ちなさ……きゃああ!!」

心なしか師匠の顔色が良くない。

ここは早く決着を付けないと……

そして師匠を抱えたまま壁を駆け出し、おそらく師匠を追いかけて

いると思われる人物……穂乃果たちの追跡を逃れた。

◇

「ここまで来れば……師匠、逃げ切りましたよ……師匠？」

僕は師匠に声を掛けるが、彼女の反応が少しおかしい。

「も、もういいから……お、降ろして……」

「分かりました」

僕は師匠を地面に下ろすと、師匠はそのまま地面に座り込んでしまった。

余程、疲れているようだ。

流石に、無茶をさせすぎただろうか？

僕たちが休憩している最中、しばらくして、星空さんを筆頭に、sのメンバーがこちらに追い付いてきた。

「やつと追い付いたにや……」

「ライ、どうして先輩を抱えて走っていたのですか？」

「いや、師匠に頼まれたから……」

「師匠？」

「矢澤先輩のことだ。みんなはどうして師匠を追いかけたんだ？」

「えっと、それは……」

彼女たちが師匠を追いかけた理由、それは……

◇

穂乃果たち、sは練習場所を探していたが、正式な部活でない限り、許可は下りないということらしい。

穂乃果たち μ 、sの現在の部員は6名……

定員が5名以上揃っていれば、部活申請して部として認められる。彼女たちの問題はそれで解決する筈だった。

しかし、生徒数が限られている中、いたずらに部活を増やすことはしたくない……という絢瀬会長の主張により、その申請は却下されようとした。

だが、東條副会長はそれに対し、アイドル研究部の部長と話を付けて部活を一つにまとめることが出来るのなら、部として認めると主張した。

そのため穂乃果たちは部活申請をする為、『アイドル研究部』の部長……矢澤にこ先輩と交渉のため部室に向かったが……

部室前で穂乃果たちと師匠は鉢合わせして、その瞬間に師匠は逃げ出した。

どうやら僕が鉢合わせしたのは追いかけてっことをしている最中だったようだ……

以前から、師匠が μ 、sのことを良く思っていないことは少ないながらも師匠と接してきたことで、何となく分かっていたが、これ程とは思わなかった。



そして僕たちは現在『アイドル研究部』の部室にいる。

師匠は、穂乃果たちが部室に入ることに不満はあったみたいだが、それ以上に疲れていたらしく、それを止める元気も無いようだった。

部室に入るなりアイドルグッズの、そのあまり多さに皆は驚いていた。

一部室にこれだけの資料が収集されているのだから驚くのも無理はないだろう。

僕も初めてこの部室に入った時は、グッズの多さに圧倒されたぐら

いだ。

それから……

ことりが部室内に大切そうに飾ってあるサイン色紙を気にしたり、花陽があるとあるグッズを見つけては、やや興奮ぎみに語りだしたりと……部室に訪れた本来の目的とは徐々に逸れつつあった。

「それで、結局アンタたちは何しに来たのよ？」

そして師匠のその問いから、ようやく穂乃果たち、sと師匠の交渉が始まった。

◇

「にこ先輩……実は私たち、スクールアイドルをやっておりまして……」

「知ってるわよ。どうせ希に、『部にしたいなら話つけてこい』とか言われたんでしょ？」

「おお、話が早い！ 流石、にこ先輩！」

事前に話の内容を把握していた師匠の様子を、部室の件は了承してくれるのだと判断し、穂乃果は輝くような眼差しで師匠を見つめるが……

「まあ、いずれそうなるんじゃないかって思ってたけど……だけど、お断りよ」

その希望は早くも打ち砕かれてしまう。

「あ、あの……私たちは、sとして活動出来る場所が必要なだけです。なので、ここを廃部にしてほしいとかではなくて……」

「お断りって言ってるのー！」

海未が交渉を続けようとするが、そんな彼女の言葉を師匠は拒絶した。

「前にも言ったけど、アンタたちはアイドルを汚しているの」

『汚している』などと評価した師匠に対し、穂乃果は反論する。

「私たち、ずっと練習してきたんです。歌も、ダンスも……」

「そういうことじゃなくて……アンタたち、ちゃんと『キャラ作り』してるの?」

その言葉に穂乃果たちが首を傾げる。

師匠はそう問いかけた直後、席を立つて一言……

「お客さんがアイドルに求めているのは、夢のような楽しい時間でしょう? だったら、それに相応しいキャラってものがあるの」

「仕方ないわね。そこで見てなさい」

師匠はそこまで言うと、一度僕たちに背を向けた。

そして……

「にっこにっこにー♪ あなたのハートににっこにっこにー♪ 笑顔届け矢澤にっこにー♪ にっこにーって覚えてラブにこっ♪」

振り向いたと同時にキレの良い動きと共に、その台詞を発した。

彼女の講座を聞いている時、僕も同じセリフを聞いたことがある。

ちなみに……

何故か毎回講座が終わる度、僕も先ほどと同じセリフを何度も言わされたことがある。

流石に、師匠が今言ったセリフ全てでは無いが……

男が言うセリフとしては、どう考えても恥ずかしいので、出来ればこのことは誰にも知られたくはなかった。

しかし……東條副会長はどうやらその音声を録音していたらしく、僕は口止めの意味合いも兼ねて、今後予定している副会長の活動を手伝うことを約束してしまった。

それはさておき……

そのセリフを聞いたみんなの反応はというと……

「うっ……」

「これは……」

「キャラというか……」

穂乃果は絶句し、海未は驚愕していた。

そして、ことりは何かを言いたそうにしていたが、師匠の勢いに押されたのか、上手く言葉が出ない様子だった。

そして他の3人は……

「私には無理……」

「なるほど……」

西木野さんは少し恥ずかしそうな様子、対して花陽は熱心にメモを取っていた。

それぞれの様子に、師匠は少し得意げに胸を張る。

どうやら師匠の機嫌を取ることに成功しそうだ。

「ちよつと寒くないかにやー」

星空さんの、この一言が無ければ……

「ちよつと、アンタ今『寒い』って……」

師匠はすぐさま、その言葉に反応した。

「じよ、冗談です……さっきのすっごい可愛いです！ 最高です！」

星空さんが慌てて先ほどの発言を撤回する。

「え、えつと……こ、こういうのも良いかも」

「そ、そうですね！ お客様を楽しませることは大事です！」

「素晴らしい！ 流星にこそ先輩!!」

星空さんに続く形で、みんなが慌ててフォローを入れ始めるが、既に遅かったようだ……

まあ、花陽だけは本気で感心しているみたいだが。

「とにかく話は終わりよ……出て行って！」

結局、師匠の機嫌が戻ることは無かった。

そして師匠が穂乃果たちを部室から追い出し、μsの部室交渉は失敗に終わった。



師匠が穂乃果たちを部室から追い出した後、彼女は部室の窓から外

を見ながら、どこか沈んだ表情をしている。
外は彼女の気持ちを表すかのような曇り空だった。

これまで強気で堂々としていた彼女からは想像できないほど、一変して落ち込んでいたのだ。

出来ることなら、師匠にそんな顔はさせたくない。

なので僕は少し強引な手段で彼女を立ち直らせることにした。

「師匠。今日も『アイドル講座』お願いします」

「えっ？」

「お願いします。今日は師匠に聞きたいことが色々あるので……」

「そ、そうね……分かったわ!! それじゃあ、本日のアイドル講座を始めるわよ!」

「イエス、マイ・ロード……!」

少し無理やり過ぎただろうか? しかし、取り敢えずは成功したようだ。

ひとまず僕は、昨日復習したところをいくつか師匠に質問するところから始めた。



「ライ」

講座も終わり、しばらくして師匠が僕に声をかけてきた。

「何でしょう?」

「ありがと……」

「え?」

「さっきのことよ。私が落ち込んだのを見て、励ましてくれたんでしょ?」

「はい……迷惑でしたらすみません」

流星に気づかれていたようだ……

「別に迷惑だなんて思ってないわよ」

師匠はどこかつまらなそうにそう答えた。

やがて、彼女の口元が僅かにに動いた。

「私、1年の頃はスクールアイドルやってたの……」

やはり、そうだったか……

師匠のアイドルに対する豊富な知識、そして理想の高さは並大抵の努力では身に付かない筈だ。

おそらくそれは、何かアイドル関係の活動をしているからこそ、得られるものなのだろう。

そして師匠は、自身の過去を静かに語り始めた。

◇

師匠がまだ1年生の頃、『アイドル研究部』という名でスクールアイドルを結成していた。

しかし、彼女の理想の高さや過酷な練習などにより、それに耐えられなくなった部員たちが次々と辞めていき、最終的に残っている部員は、師匠ただ1人となってしまった。

師匠はそれで諦めることはせず、2年生の頃は1人でもアイドル活動を続けていたらしい。

しかし、やがて3年生へ進級し部員も一方に集まらないことから、アイドルの活動を殆ど諦めていたそうだ。

そんな状況で、彼女はμsの存在を知った。

師匠がμsに対し、気に入らない素振りを見せるのは、かつての自分を重ねたある種の「憧れ」の一面の表れなのだろう。

師匠は自身の過去を打ち明けた。

なるほど……副会長が話すのを洩る訳だ。

「やっぱり私のやり方じゃ、ダメなのかな……」

師匠が独りでにそう呟いた。

その声の小ささから、僕や他の誰かに対する問いかけでは無かった、単なる独り言なのだろう。

「そんなことは、無いと思いますよ」

しかし、僕はその独り言に対し、あえて口を挟んだ。

「師匠のアイドルに駆ける想いは、決して間違っただけではありません」

「ライ……?」

聞かれているとは、いや、たとえ聞かれていたとしても返答されるとは思わなかったのだろう。

師匠は、迷いのある眼差しを僕に向けた。

僕のような素人がそんな発言をしたところで、慰めにもならないのかもしれない。

しかし……

「そのことは、これまで師匠の講座を受けてきた僕が知っています……それとも、弟子である僕の判断は信用できませんか?」

些か偉そうな発言をしたことに内心、後悔はあるものの、この発言を撤回するつもりは無かった。

師匠は暫しの間僕を見つめ、そして一息ついた後……

「全く……弟子に励まされるなんて、私もまだまだだね」

そう呟いた彼女の表情には、先ほどまでの曇りは無かった。

STAGE 16 アイドル リスタート

「そう……にこっちは話したんやね」

アイドル研究部の活動が終了した後、僕は生徒会室へ訪れた。既に放課後になっていたので、誰もいないだろうと思っていた。しかし、そこには東條副会長が窓越しに外を眺めながらその場に立っていた。

ちなみに絢瀬会長の姿は見当たらない。

おそらく先に帰宅したのだろう。

そして生徒会室に戻った途端、彼女は僕に師匠のことについて聞いてきた。

副会長に事の経緯を説明してしばらく経った後、彼女はある問いかけをしてきた。

「ライ君はにこっちのこと、このままで良いと思ってるん？」

「え？」

副会長は少し微笑みつつ問いかける。

「ライ君はどうしたいん？」

「それは……」

副会長は先ほどと同じように微笑み、そして真剣な眼差しで僕を見た。

現在の僕が優先すべきこと……

それは自分の記憶を取り戻すことだ。

それを優先するなら、これ以上この問題に深入りしないほうがいいかもしれない。

だが師匠は僕に、スクールアイドルについて色々と教えてくれた。彼女の元で記憶とは全く関係のない知識に触れているうちは、不思議と記憶のことは気にならなくなっていた。

今まで記憶のことで悩み、精神的に疲れていた僕に、彼女のお陰でひととき休む機会を得た。

もつとも、このことは彼女に話していないので、彼女の知る余地は無いだろうけど……

とにかく、僕はそのことで師匠に感謝している。
そんな師匠もまた、自身の過去に悩んでいる。

部員が立て続けに抜けていった頃から、そんな苦しみをたった1人で、ずっと抱えてきたのだろう。

僕を記憶の悩みから一時的に救ってくれた彼女に、自身の過去のことで苦しんでほしくは無い。

彼女に対し、僕に何か出来ることがあるのなら……

その時、制服の内ポケットから携帯の着信音が鳴り響いた。

副会長に断りを入れつつ電話を取る。

「ライ、少し相談したいことがあるのですが……」

着信の相手は海未だった。

「相談？」

「はい。にこ先輩のことで少し……」

「分かった、後で向かうよ。場所は？」

「私は校内にいますけど、ライは？」

「こちらも校内にいる」

「分かりました。それでは校門で待ち合わせしませんか？」

「そうしよう。それじゃあ、また」

偶然とはいえ、丁度良い機会だ。

彼女たちにも、師匠のことについて相談してみよう。

「決まったようやね？」

通話が終了した後、副会長がそう尋ねた。

「はい。僕は記憶のことで、一時的に師匠に救われました。だから、今度は僕が師匠を助きたい」

僕がそう言うと、副会長は上着のポケットから鍵を取り出し、それを僕に差し出した。

「ライ君……にこつちをお願い」

「分かりました」

このタイミングで渡されたこの鍵はおそらく、アイドル研究部の鍵だろう。

なぜ副会長が持っているのかと一瞬思ったが、今はそのことを気に

することよりも他に優先すべき事がある。

その後、僕は師匠のことを相談するため、途中で合流した海未と共に穂乃果の自宅へと向かった。



穂乃果の自宅へ到着した後、僕は師匠のことを穂乃果たちに相談した。

3人とも既に、師匠の過去のことは知っているようだ。

「どうやら副会長から事前に聞いていたらしい。」

「やはり、ここ先輩を説得するのは難しいのではないですか？」

「私もそう思う」

「先輩の理想は高いですから……私たちのパフォーマンスに納得してくれそうにもありません。説得に耳を貸してる感じも無いですし」

海未、ことりの2人が難色を示す。

「うーん、そうかなあ？」

しかし、穂乃果の考えは違ったようだ。

「ここ先輩って、私たちにもちよつとは興味あるんだよね？」

穂乃果の疑問を聞き、先ほどの部室の一件を思い出した。

師匠が本当に μ 、 s に興味すら無ければ、部室に入れたり、自身の

キャラクターを見せることは決してしなかっただろう。

「ほんのちよつと何かあれば、上手くいきそうな気がするけど」

「具体性が乏しいですね」

「それはそうだけど……あっ！」

困惑の表情をしていた穂乃果であったが、それが突然何かを思いついたように顔色を変え声を上げた。

「穂乃果、何か思いついたのかい？」

「うん！ これってね、海未ちゃんの時と一緒になんだよ！」

「私……ですか？」

海未は心当たりが無い様子だが……

「そう言えば、ライ君には話して無かったよね？」

僕は穂乃果の問いに頷いた。

おそらく海未の過去に何らかのヒントを得たんだろうけど、それが何のことかは分からない。

彼女もまた、過去に何かあったのだろうか？

「えつと昔、海未ちゃんが……」

そして穂乃果が海未の昔について話し始める。

◇

小さい頃の海未は今以上の恥ずかしがり屋だったらしく、当時は穂乃果とことり……それから数名の友達と遊んでいたのを側から眺めていたそうだ。

1人でいる海未を穂乃果が遊びに誘い、それから3人は友達になり、一緒に遊ぶことになった……ということだった。

「そんなことありましたっけ？」

しかし、当の本人は覚えていないようだけど。

つまり穂乃果が思いついたこととは、海未を遊びに誘った時と同じように、師匠をμsのメンバーとして勧誘しようという考えなのだろう。

「にこ先輩って昔、スクールアイドルやってたんでしょ？ だったら、もう一度しようって誘うべきだよ！」

「だけど穂乃果ちゃん、にこ先輩にはどうやって話をするつもりなの？」

「今日のあの様子を見る限りでは、部室にすら入れてくれそうにもありませんし……」

そこまで意見が出たところで、僕は一度考えをまとめる。

僕にアイドルのことを教えてくれた時の師匠の表情は輝いて見えた。

おそらくあれが、当時アイドルを続けていた師匠の本来の姿なのだろう。

彼女がμsに加われば、もう一度彼女の輝きを取り戻すことが出

来るかもしれない。

穂乃果たちに協力し、師匠をもう一度アイドルとしての再スタートさせることが、僕に出来る恩返しになるかもしれない。

ならば、ここは……

「いや、それなら大丈夫だ」

「ライ君、何か考えがあるの？」

ことりの問いに答える代わりに先程、副会長から受け取った鍵をポケットから取り出し、それを穂乃果たちへ差し出した。

「鍵……ですか？」

「アイドル研究部の鍵だ」

「どうして、ライが持っているのです？」

「副会長が貸してくれた……この鍵を持って明日、*μ's*のメンバー全員で部室に来てほしい。そして……」

そこまで言おうと僕は一度、言葉を切った。

「矢澤先輩の……師匠の理想に込めてあげてほしい」

「うん……任せて、ライ君！」

穂乃果の頼もしい返事を聞き、後は彼女たちに託すことにした。

しかしこれはある意味、師匠に対する裏切りだ。

おそらく今後、僕は彼女に嫌われる事になるだろう。

それでも、彼女が過去に囚われず前へ進む事が出来るなら、僕はそれでも構わない。

◇

翌日、僕はアイドル研究部の部室まで足を運んだ。

穂乃果たちに託したとはいえ、少しだけ不安もあったからだ。

部室前まで近づくと、中から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「アイドルっていうのは笑顔を見せる仕事じゃ無い……笑顔にさせる仕事なの！ それをよーく自覚しなさい！」

声の正体はやはり、師匠だった。

扉越しに聞こえるほどの大声だった。

その彼女の声には先日のような拒絶の態度は感じられない。暫くして、穂乃果たちの声も聞こえてきた。

この様子なら、もう大丈夫だろう。

不安が杞憂に終わったことに安心し、僕は気付かれないようにそつと踵を返した……

◇

その後、僕は生徒会補佐としての業務が残っていたので、生徒会室へ向かった。

そこに入ると先日とは違い、副会長の他に絢瀬会長もいた。

「お疲れ様です。会長、副会長」

「皇くん。お疲れ様」

「お疲れー♪ どうやら上手くいったみたいやね?」

「はい。おかげさまで」

もつとも今回の件で僕がしたことといえば、穂乃果たちに部室の鍵を渡したぐらいだが。

「何の話?」

会長がそう尋ねるが……

「ピ・ミ・ツ♪」

茶化すような態度で副会長は答えた。

「何よそれ……まあ良いわ。それよりも皇くん、早速で悪いけれどこつちの資料作成、頼んでも良いかしら?」

「はい。大丈夫ですよ」

会長は少し不機嫌になっていたが、僕たちがμsに手を貸したことを知れば、今以上に機嫌が悪くなることだろう。

会長には申し訳ないが、この話題はここまでにしておこう。

僕は取り敢えず、頼まれた資料を順番に処理し始めた……

◇

そして翌日、僕は師匠に呼び出された。

今日の彼女は少しばかり機嫌が悪いようだ。

「ライ……呼ばれた理由は分かっているわよね？」

「はい」

おそらく穂乃果たちが部室にいた件だろう。

「穂乃果たちに鍵を渡したのは、あんたね？」

「はい」

「……」

僕がそう答えると、彼女の機嫌が益々悪くなっていく。

彼女からしてみれば、信賴していた弟子にいきなり裏切られた様なものだから、怒るのも無理はないだろう。

「大変だったんだからね！　いつも通りに部室に来てみれば、そこにはあの子たちがいるし、部室を片付けたら、私のことを部長とか言つて、いきなりもてはやすし……」

「すみません。出過ぎた真似をしました」

「まったくよ……良い？　一度しか言わないから、よく聞きなさい！」

「はい」

理由はどうあれ、勝手なことをして師匠を困らせたことは事実だ。嫌われてしまっても仕方ない。

ここは素直に怒られておこう。

そう思っていたのだが、次の瞬間、聞こえてきた言葉は……

「あ、ありがとねっ……」

「え？」

不機嫌な表情の彼女から出てきたのは、感謝の言葉だった。

「アンタのお陰で、私はもう一度スクールアイドルを目指すことが出来たわ……だから、そのお礼」

なるほど。しかし、そう言われても僕は大したことはしていない。

僕はただ、穂乃果たちに部室の鍵を渡したただけだ。

その鍵も元を辿れば、副会長から借りたものだし……

「私、ずっと一人で部活やってたから。そんな中、あんたにアイドルについて話してた時は、その……た、楽しかったのよ」

彼女は一度言葉を切り、そして続けた。

「私を、sに誘ってくれた穂乃果たちにも感謝してるけど……あ、あんたにも感謝してるってこと！」

「師匠……」

やや照れた表情で話す師匠の様子、そしてその言葉は、少なくとも僕を嫌っているという訳では無さそうだ。

◇

「これから、私はアイドル研究部の部長、そして、sとしてもっと忙しくなるわ。だから、今までみたいにあんたにスクールアイドルについて教えることも、難しくなるわね」

「そうなりますね」

これで彼女はスクールアイドルへの道をもう一度歩み始める。

師弟関係が解消されたことに、僅かな寂しさを覚えるが、ここは彼女の門出を祝おう。

「まあ、あんたは覚えが良かったし、私がこれ以上教えることも特に無いんだけどね」

師匠……先輩はそう言うが、それは些か買い被りすぎな気がした。

「それに、あんたにはこれから私のファンになってもらうんだから、いつまでも弟子のままでは困るのよね」

「えっ……？」

ファンという意味は複数あるがこの場合、特定の人物に対する支持者のこと指すのだろう。

つまりは僕が先輩の支持者、ファンになるということだが……

一体、いつからそんな話になっていったんだ？

「この私、矢澤にこのスクールアイドル復帰に貢献したあんたには……特別にこの私、矢澤にこのファン第一号にしてあげるって言うてるの。喜びなさいー！」

何というか、僕は最後まで先輩に振り回されっぱなしだな……

「言っておくけど、拒否権なんて無いわよ！ 分かった？」

だけど、不思議と気分は悪くない。
だから……

「イエス・マイロード」

「僕は了解の意を込めて、そう返答した。
こうして……」

ひよんなことから始まった、矢澤に先輩と僕の師弟関係は、先輩がμsに加わることで終わりを迎えた。

こうして、μsは7人となった……



ライとの話が終わり帰宅した後、疲れていた私は直ぐにベットへ横になり、そのまま眠りについた。

そしてその夜、私は妙な夢を見た。

その夢には、ライにそっくりな男子が映っていた。

そのライの服は学校の制服ではなく、黒を基調とした見慣れない服だった。

「すまない、ちょっといいかな？」

彼はドア越しに誰かに声をかけた。

「どうしたライ？」

ドアが開いて現れたのは、妙な仮面をつけた謎の人物だった。

声は機械を通してあるみたいで、男か女かハッキリとは分からないけど、どちらかと言うと男寄りの声をしていた。

そしてその男はハッキリと『ライ』という名前を口にした。

ということは、このライに似ている男子は本人？

「実は、伝えることがあつてきた。僕は……騎士団を脱退する」
「……なに!？」

仮面の男は表情こそは見えなかったけど、声は動揺していた。
っていうか、騎士団って何よ？ どっかの劇団の名前？

「理由は何だ？ 答えによっては……」

それからライは、話し始める。

自分が記憶を思い出したこと……その内容までは詳しくは話さなかったけど。

「なるほど、理由は分かった……しかし、だからといって突然消えられなくても困る。お前は私たちにとって掛け替えのない人間だ」

「ありがとう。でも、ダメなんだ。僕は此処にはいられない」

その言葉を聞いてもなお、ライの意思は変わらない。

「記憶が戻ったことは分かった。では、ここを去らねばならない理由を聞かせてくれないか？ お前が無責任に役割を放棄するとは、私は思えない」

「思い出してしまっただけだ。……僕は、長く生きられないことを」

「長く……生きられない？」

その言葉を聞いた瞬間、仮面の男は言葉を失っていた。

そしてライも何も言えず、2人の間にしばらく沈黙が流れた。

その沈黙はいつまでも続くと思ったけど、やがて仮面の男が先に話し始める。

「……そう結論を急ぐな。ただお前が去るという以外に、何か方法は必ずある筈だ」

その男の言葉は仮面越しで分かりにくいけど、その言葉は心からライを気遣っているものだと感じた。

「ここには優秀な技術者もいる。彼女の医療技術なら、お前を救えるかもしれない」

「ああ、そうだな。考えておこう」

ライはそれだけ言ってその部屋を出た。

(ありがとう。さよならだ)

ライは閉じた扉に向かって、心の中でそんな言葉を投げていた。

ライが記憶喪失だということは、希から聞いていた。

あいつにどこか暗い影を感じたのは、記憶が無いからだと思っていた。

だけど、記憶を取り戻したこのライの姿を見ても、どこか寂しそうで、そして悲しそうな姿をしていた。

少なくとも、私にはそう見えた。

ただの夢だと分かっているけど、私にはこのライが全くの別人だとは思えなかった。

ライ、あんた一体何者なの？

次の朝、目が覚めたときには、私はこの夢の内容を綺麗さっぱり忘れていた……

STAGE 17 ことりの秘密

「……ことり？」

「ら、ライ君!？」

ある日の休日……

とある店で、ことりと僕はその場で鉢合わせ、硬直していた。

何故そうなったのか、時は少しばかり遡る……

◇

その日、僕は気分転換に街を散歩していた。

ここ最近、穂乃果たち⁴ sの手伝いや生徒会補佐としての活動などもあり、僕の学校生活は以前よりも忙しくなっていた。

最初の頃……僕がまだ、音ノ木坂に入る前は、記憶探しが目的での街を散歩していた。

しかし音ノ木坂で様々な人々と関わってきた影響か、若干気持ちの余裕ができたため、最近では記憶探しよりも散歩すること自体が目的になっていた。

散歩の途中で『メイドカフェ』と看板に表記してある、不思議な店を見つけた。

メイドカフェ？

その単語には聞き覚えが無いが、メイドという存在の知識はある。メイドというのは確か……清掃や洗濯、炊事など家事労働を行う女性使用人のことだ。

そして僕が知っている限りでは、彼女たちは貴族などの上流階級に仕えている存在の筈だ。

ということとはつまり、使用人が主人に内密で店を営業しているという事なのだろうか？

或いは、どこかの貴族が店を経営しているという可能性も……
多少の興味はあるが、別にそこまで気にするほどでもないか。

それよりせつかくの休日なのだから、もう少し街を見て回ろう。
そう思い、僕はその場を離れようとしたのだが……

「あのー……」

不意にメイドの格好をした、その店の従業員と思しき女性に声を掛けられてしまった。

僕はその店に入るわけでもなくその場で店を眺めたまま、ただ立っている。

この状況では流石に怪しまれただろうか？

「宜しければ、いかがでしょうか？」

するとその女性は、突然そんなことを言い出す。

僕にこの店を勧めているのだろうか？

ここで断って変に怪しまれると面倒だ。ここは勧められるままに、この店に入るべきだろう。

そうして僕は、謎の店『メイドカフェ』に入ることになったのだが

……

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

「……ことり？」

「ら、ライ君!？」

そこで案内に来たメイド……ことりと出会った。

◇

知り合いとはいえ一応客ということもあり、ことりにテーブル席まで案内された。

店内にはことりの他にも、数人のメイドの格好をした女の子たちが働いている。

年齢は僕と同じくらいで随分と若いが、ことりや彼女たちはどこかの貴族に仕えているのだろうか？

しばらくすると、店員が注文を聞きに来たので僕は取り敢えず紅茶を注文した。

そして、注文した紅茶を運んで来たのは先ほどの店員ではなく、こ

とりだった。

「お、お待たせしました……」

ことりは動揺していた。

おそらく、働いている姿を知り合いに見られるのが恥ずかしいということだろう。

その気持ちは分からなくもないが……

「ら、ライ君……こ、このことは、えっと、その……」

何を言いたいかは大体分かったので、彼女が言い切る前に答えた。

「誰にも言わないから安心して」

「あ、ありがとう……！」

僕がそう答えると、ことりは安心したようにいつもの笑顔に戻った。

そういえば、前にもこんなことがあった気がする。

あれは確か……

海未がみんなに内緒でライブの特訓をしているのを、僕が偶然発見した時だったか……

「えっと、ライ君。この後暇かな？」

僕がその時のことを思い出していると、ことりが小声で話し掛けてきた。

「特に用事は無いよ」

「そ、それじゃあ、もうすぐ私のシフト終わるから、ちよつとだけ待ってもらっても良いかな？」

「分かった。それなら此処で待つてるよ」

「ありがとう。それじゃあごゆっくりどうぞ、ご主人様♪」

それだけ言って、ことりは立ち去ってしまった。

今は一応客だから、ことりも店員として対応したのだろうけど……少し恥ずかしい。

僕はそんな気持ちを誤魔化すように、とても良い香りのする紅茶を口へ運んだ。

「美味しい……」

僕は紅茶の香りと味を堪能しつつ、ことりを待った……

◇

ことりの仕事が終わった後、僕たち二人は街を歩いていた。

「それにしても……ちよつと意外かも」

「意外？」

「うん。ライ君がメイドさんに興味あったこと」

「別にそういう訳では無いが……」

興味といえば、メイドの件で一つだけことに確認したいことがあった。

「無理にとは言わないけど、その事で少しでも良いかな？」

「え、えつと、何かな？」

戸惑っている様子ではあったが、僕はどうしても気になっていることをことに質問した。

「ことりって実は……どこかの貴族に仕えているのか？」

「えっ？」

僕の質問を聞いた後、ことりは一瞬立ち止まる。

そして……

「え、えーつと……ライ君？　メイドカフェっていうのは、その……」

◇

結局、この件は僕の誤解だった。

メイドカフェの従業員は本物のメイドという訳ではなく、メイドの格好をして働いているというだけのことだった。

別に、ことりやあの女の子たちが貴族に仕えていた訳では無い。

何というか、ここまで自分の推測が外れると、少し……いや、かなり恥ずかしい。

「それにしても、ふふっ……」

そして僕の勘違いがあまりに可笑しかったのか、ことりは先程から笑っていた。

「そ、そんなに笑うことは無いだろうか？」

「ご、ごめんね。だけどライ君ったら、突然変なこと聞いてくるんだもん」

僕の無知が招いた結果なのだから仕方ないとは思うのだが、そろそろ笑うのを止めてもらいたい。

僕は誤魔化しも兼ねて、もう一つことに尋ねた。

「それで、僕はこれからどうすれば良い？」

「え？」

「ことりは僕に用があつたから、呼んだのではないのか？」

「あ、そうだった……えつとね？　ライ君、私がアルバイトしてること内緒にしてくれたでしょ？　だから、何かお礼出来ないかなあつて」

「礼には及ばないよ」

「でも……」

「それをいうなら、ことりや皆には学院ではいつも良くしてもらってるし、むしろ僕がその分を返したい……今回はそういう事で納得してくれないか？」

「うん。分かった……優しいんだね、ライ君って」

「そうかな？」

「もう……そこで首を傾げちゃダメ」

「……すまない」

『優しい人間だ』などと言われると、つい条件反射で否定してしまう。

僕自身、こういう姿勢は少し異常だとは思ってはいるけど……

そういうところも、これから自分を知っていくうちに直していけるのだろうか？

ついだということで、こわりにメイドカフェで働いていた理由についても質問してみた。

彼女は衣装作りが好きで、今回の件もメイド服が可愛いからというのが、理由の一つだそうだ。

そして気が付けば、彼女は伝説のメイド『ミナリンスキー』と呼ばれる存在にまでなっていたらしい。

実際、ことりの接客は見事なものだった。

彼女の接客は手馴れていて、常に笑顔を絶やさない。

あの店に訪れた客は皆、彼女に癒されている様子だった。

おそらく、彼女目当てに訪れた客も何人かいたのだろう。

そういえば以前、ことりがアイドル研究部の部室に飾ってあったサイン入り色紙に注目していたことがあった。

あの色紙のサインには確か『ミナリンスキー』と書いてあったような……

つまりあれは、ことりのサインということだろう。

こうして今日はことりの新たな一面、そしてメイドカフェという謎の店について知ることができた、少し変わった一日となった……

STAGE 18 女神たちの日常

「部活動紹介……ですか？」

「ええ、そうよ。希が担当するのだけど、もし良ければ皇くんもどうかしら？」

早朝……

学院に登校すると絢瀬会長から依頼を受けた。

内容は部活動紹介のビデオ作成をする為、各部へ取材をすること。おそらく、それを学院のHPに掲載して、入学希望者を増やす狙いがあるのだろう。

音ノ木坂は現在、廃校の危機に瀕している。

僕としても、居心地の良いこの学院が無くなってしまふのは本意ではない。

生徒会補佐という立場もあるのだし、ここは引き受けるべきだろう。

「分かりました、やってみます」

「ありがとう。担当は希だから、詳しくは彼女に聞いてちょうだい」「了解です」

そして東條副会長を見つけて詳細を確認した。

日時は翌日から数日間……撮影は僕が担当し、副会長はナレーションをする予定だ。

撮影の特徴としては、部員のありのままの姿を撮影したいそうさだ。

そして翌日……

「今日はよろしくね。ライ君」

「よろしくお願ひします。副会長」

「うーん、硬い！ 硬いなあ……これから取材にいくんやから、もつと明るくいかないと……ほら、笑って笑って」

そう言つて僕に笑いかける副会長を真似して、僕は笑顔らしき表情を作つてみた。

笑顔……こんな感じか？

「ご、ごめん……マイペースでいこつか？ 特に笑顔は要練習やね」

「……努力、してみます」

「どうやら彼女が望んだ表情は出せなかったようだ。」

「取り敢えず馴染まないことやね。それじゃ、そろそろ行こっか?」

「分かりました」

僕はその後、副会長と共に撮影の仕事を行った。

彼女の言う通り、今は少しずつ馴染んでいこう。

◇

いくつかの部活の撮影が終了した後、最後はμ、sの番になった。彼女たちの中には恥ずかしさから撮影を戸惑う者もいたが、μ、sの宣伝と新曲のPV撮影に使用するカメラを貸し出すこと……これらを条件に撮影に協力してもらえることになった。

そして数時間後……

μ、sの部室で穂乃果、海未、ことり、星空さん、副会長、僕の六人でここまでの映像を確認しているのだが、その内容の一つが……スクールアイドルとはいえ、彼女たちは学生である。

プロのように時間外で授業を受けたり、早退が許されるようなことはない。

朝練をしているためか、授業中は熟睡。

その後、昼食をしつかり摂ってから再び熟睡……それを先生に発見されるといふ一日であった。

これがアイドルとはいえ、まだ高校生である高坂穂乃果のありのままの姿であった。

……というものだった。

「ありのまま過ぎるよ!!」

部室内に穂乃果の声が届きます。

宣伝というには、些か残念な内容になっていた。

「って、いつの間撮ってたの!?!」

穂乃果はそう言って僕を見るが、この映像を撮影したのは僕ではない。

では、誰が撮影したのかというところ……

「うまく撮れてたよー、ことり先輩」

「ありがとうー。こっそり撮るのドキドキしちゃった♪」

授業中は僕がカメラを構えるのも不自然なので、隠し撮りをことりに依頼した。

「こっつ、ことりちゃん!? ひどいよお」

「普段からだらけているから、こんな事になるのですよ」

次は海未の映像をチェックする。

その映像には、弓道部で練習をしている彼女の姿が映っている。

弓を一本放つて一息ついた後、周囲を確認……その後鏡へ向かって笑顔の練習をしていた。

「プライバシーの侵害ですっ!」

映像の途中で、海未は素早い動作でカメラの映像を切った。

「よーし、こうなったらことりちゃんのプライバシーも……」

次に何を思い付いたのか、穂乃果がクルクルと回りながらことりの鞆の前まで近付き、その鞆の中身を確認しようとする。

しかし、素早い動作でことりに回収されてしまう。

「ことりちゃん、どうしたの?」

「何でもないのよ?」

「で、でも……」

「ナンデモナイノヨ」

「う、うん……」

穂乃果はことりの焦りようが気になったようだが、ことりから謎の圧力を感じ、それ以上は聞かないことにしていた。

鞆の奥から少しだけ見えたが、そこには『ミナリンスキー』としてアルバイトしていたことりの写真が入っていた。

この慌てようからして穂乃果たちにも、この件は秘密にしているのだろう。

「完成したら各部へチェックしてもらおうようにするから、問題があればその時に言ってくれば修正を……」

「で、でも! この映像を生徒会長が観たら……」

副会長の言葉を遮るように、穂乃果がそう言った。

確かに今の映像を会長が観れば、μ、sへの印象が更に悪くなってしまうだろう。

それを想像したのか、穂乃果が涙ぐんだ表情で副会長を見つめる。

「まあ、そこは頑張ってもらおうとして……」

「そ、そんなあ……希先輩何かしてくれないんですか？」

「残念やけどウチに出来ることは、誰かを支えてあげることだけ」

「支える……？」

東條先輩は副会長という立場もあるため、μ、sのことを全面的に支援することは出来ない。

おそらく、生徒会長である絢瀬先輩に配慮しているからなのだろう。

会長は今の所、μ、sを快く思っていない。

アイドルという存在が、彼女には軽いものとして見えているのだろうか？

それとも、ただの嫌がらせだろうか？

前者は兎も角、後者は考えづらい。

会長は僕が音ノ木坂で学院生活が送れるよう、色々と配慮してくれた人だ。

そんな人が、ただの嫌がらせでμ、sを陥れようとしている……なんて、少なくとも僕には考えられない。

「凜もやってみたいにゃ」

僕が会長について考察していると、星空さんが机に置いてあるカメラを見てそう言った。

それを合図に、僕の思考も切り替わる。

確かに僕よりも星空さんの方が、部員の緊張を解すという意味で適任だろう。

今回の撮影は、部員の自然な表情を撮ることを目的としているのだから。

それに、先程まで様々な部活の撮影をしていたのだが、部員の人たちは動きが少しぎこちなかった。

そういう訳で、ここは僕よりも同じ部員の星空さんの方が適任かもしれない。

「副会長、良いですか？」

「ウチは構わんよ。でも凜ちゃんってカメラ使えるの？」

「あまり使ったことないです」

「なら僕が教えるよ」

「先輩ありがとうー」

そして、星空さんにカメラの使い方を教えている途中、勢いよくドアが開きそして……

「取材が来るって本当!?!」

矢澤先輩が慌てた様子で部屋に入ってきた。

「もう来てますよ」

「ことりがそう答えた瞬間、彼女は一瞬で表情を切り替え……」

「にっこにっこにー! みんなの元気に、にこにこにーの矢澤にこでーす!」

「ごめん、そういうの知らないから」

副会長がそう言い、皆もそれに同調した。何気に容赦が無い。

しかし今回の取材内容は、生徒たちの素顔に迫るといふものだ。

それを彼女に説明すると……

「す、素顔……ああそつちのパターンね? OK、ちよつと待ってねー」

先輩は髪に結んであるリボンを解き……

「いつもはこんな感じにしてるんです。アイドルの時の私はもう一人の私……髪をキュツととめた時にスイッチが入る感じで……あつ、そうです。普段は自分のことを『にこ』なんて呼ばないんです」

と、キャラを装うが……

「……って、みんなは!?!」

「穂乃果たちなら、中庭に……」

彼女の健闘も虚しく皆にはスルーされていた。

「えつと先輩、今回の取材なんですが……」

「わ、分かったわよ。普段通りにやるわよ……」

彼女のキャラ作りは見事なものだとは思いますが、今回の撮影の趣旨と
はずれている。

申し訳ないが、ここは納得してもらおう。

「僕たちも中庭に向かいましょう」

「そ、そうね……」

自分の演技がスルーされた為か中庭へ向かうまでの間、彼女は少し
落ち込んでいた。

◇

「まずは、アイドルの魅力について聞いてみたいと思います」

次は中庭で花陽、西木野さん、そして星空さんへの取材が始まった。

「それでは、花陽さんから」

「えっ!? えーと、その……」

「かよちゃんは昔からアイドル好きだったんだよねー」

「あ、はい!」

緊張して言い淀んでいた花陽に星空さんがフォローを入れる。

この調子なら、問題なく取材は進むだろう。

そう思っていたのだが……

「えっと……ぷっ、ふっ」

「ち、ちよつとカメラ止めて!」

次の瞬間、三人が吹き出しそうになったため一度カメラを止める。

まあ、彼女たちが笑うのも無理はない。

何故なら……

「いやー……緊張してるみたいだから、解そうかなって思っ」

「頑張っているかね?」

穂乃果は変顔を、ことりは妙なお面を着けて、それぞれ笑わせてき
たからだ。

確かに緊張は解れたみたいだが……

余りのグダグダっぷりに、思わず僕も苦笑した。

「これじゃあ、μ'sがどんどん誤解されるわよ!」

「おー！ 真姫ちゃんが、sの心配してくれた！」
「べ、別に、私は……」

それから一旦撮影を切り上げ、ここまでの映像を確認した。今までの取材部分だと、sの魅力が今一つ伝わらない。人によつてはふざけていると捉えられかねない。

しかし、次のシーンでその評価は覆ることになるだろう。それは、屋上での彼女たちの練習だ。

◇

「花陽、ちよつと遅いです。凜はちよつと早いです。真姫、もっと大きく動いてください」

「はい！」

「にこ先輩！ 昨日言ったところのステップ、また間違ってますよ。ことりは、今の動きを忘れずに」

「うん、分かった！」

「う……分かつてるわよお」

指揮は海未が執り、みんなは指示通りに動いている。

「穂乃果、疲れてきた？」

「まだまだー！」

練習を続けてそろそろ一時間が経過する。

そして……

「ラストおー！」

彼女たちはぶつ通しでダンスを続けた後、ようやく休憩を取る。

みんな息が上がっているようだが、そこに文句を言う者はいない。

今日撮影した限りでは、何処かふざけているような印象があったものの、メンバー間の仲の良さ、そして練習を通して伝わってくるアイドルに対する熱意。

宣伝としての素材は十分に揃えることが出来たと思う。

彼女たちの努力を無駄にしないよう、上手く編集していこう。

◇

そして放課後……

僕と副会長は生徒会室で、今まで撮影したビデオの編集作業を行なっていた。

その途中で副会長が不意に尋ねてきた。

「μ'sのリーダーって穂乃果ちゃんだよね？」

「はい」

「うーん。どうして穂乃果ちゃんだろうか？ 練習の時だって、海

未ちゃんが中心になってたみたいやし」

「それは……」

副会長にそう言われ、改めて考えてみる。

確かにあの時、周りの指揮を執っていたのは海未であり、彼女は練習のメニューも組み立てている。

そういう面だけ見ると、穂乃果よりも海未の方がリーダー適正があるのかもしれない。

では、穂乃果がリーダーである理由とは何だろうか？

漠然とはしないが、いくつか思いつく理由ならある。

それを副会長に話してみた。

「穂乃果にはスクールアイドルを通して、学院を廃校から救いたいという熱意があります。皆もそれに引っ張られてきたのではないかと……僕も彼女と接していく中でそれを感じました」

「ふーん、ライ君にはそう見えるんやね」

もつとも、副会長はあまり納得していない様子だ。

「そこまで気になるのですしたら、穂乃果たちに直接聞いてみてはどうですか？」

「そうやね……ちようどこの後、穂乃果ちゃんのご家族にも取材するつもりやし」

「了解です。僕はこのまま編集作業を続けます」

「うん。お願いね〜ライ君」

そう言って副会長は部室を後にした。